長岡京市文化財調査報告書

第48冊

2006

長岡京市教育委員会

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第48冊

2006

長岡京市教育委員会

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

（1）第1区の後円部・前方部・造り出し・周壕（西から）

（2）第1区の後円部・前方部・造り出し・周壕（北西から）

（1）第1区造り出し北辺の基底石列（北東から）

（2）第1区造り出し北辺の基底石列（東から）

（3）第2区の後円部・周壕（西から）

序　　文

かけがえのない、私たちの「まち」が生き生きと輝き、市民が愛着と誇りをもつためにも、郷土の歴史と文化遺産や自然を理解することで新たな地域の良さが発見でき、愛着が育まれ、文化財が守られていきます。

本市は史跡恵解山古墳をはじめ、埋蔵文化財の豊富な「まち」であります。史跡等の文化財は、地方や地域の歴史文化を今に伝える大切な資源であり、市民共有の財産でもあります。このことから、地域の歴史や文化を知る上で欠くことのできない遺産として、広く市民に開放し、活用を図ることは、大切なことであります。

本市に所在する恵解山古墳は、５世紀中頃に築造された、乙訓地方最大の前方後円墳で、前方部から７００点の鉄製武器類が出土し、全国的にも貴重な古墳として注目されています。そこで、恵解山古墳を文化的活動・憩いの場として活用を図るため、平成１６年３月に保存整備基本構想を策定し、平成１６・１７年度の２ヵ年で、基本構想を踏まえて、保存整備の方針や活用の方法、修景計画などについての基本計画の策定を行っております。

特に、基本計画策定にあたっては、当初から市民との協働を基本とし、市民との対話を進め、恵解山古墳の保全整備のあるべき姿を探っていくため、策定委員の公募とワークショップの開催等を行っているところであります。これにより、計画策定の透明性を高め、恵解山古墳に対する理解と愛着を育んでいきたいと考えております。

さて、ここに刊行いたします報告書は、国・府補助事業として平成１７年度に実施した発掘調査成果をまめたものです。今回の調査では恵解山古墳の西側造り出し部から前方部にかけての基底石を良好な状態で確認するとともに、発掘調査の着手前に独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の協力を得て地中探査を行いました。その結果、西側造り出しや後円部の輪郭がおよそ明らかになり、基本計画策定にあたっての墳丘の規模、形態等の貴重な基礎資料を得ることができました。

結びにあたり、調査について種々のご指導をいただきました諸先生方、地中探査を実施していただきました奈良文化財研究所の方々、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関、また発掘調査にご協力いただきました近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成１８年３月

長岡京市教育委員会

教育長　　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京市教育委員会が平成17年度に国庫補助事業として実施した、恵解山古墳第６次調査・長岡京跡右京第859次調査（７ＡＮＱＫＫ－６地区）の概要報告である。

2．発掘調査に先立ち、2005（平成17）年７月22・23日に地中探査を行った。

3．発掘調査は、2005（平成17）年９月20日から11月９日まで、京都府長岡京市勝竜寺1203－３他において実施した。

4．発掘調査は、長岡京市教育委員会から委託を受けた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、同センター調査係総括主査山本輝雄、主査中島皆夫が担当した。

5．長岡京跡の調査次数は、右京域での調査を通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。

6．長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に『長岡京市域地形分類図』『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。

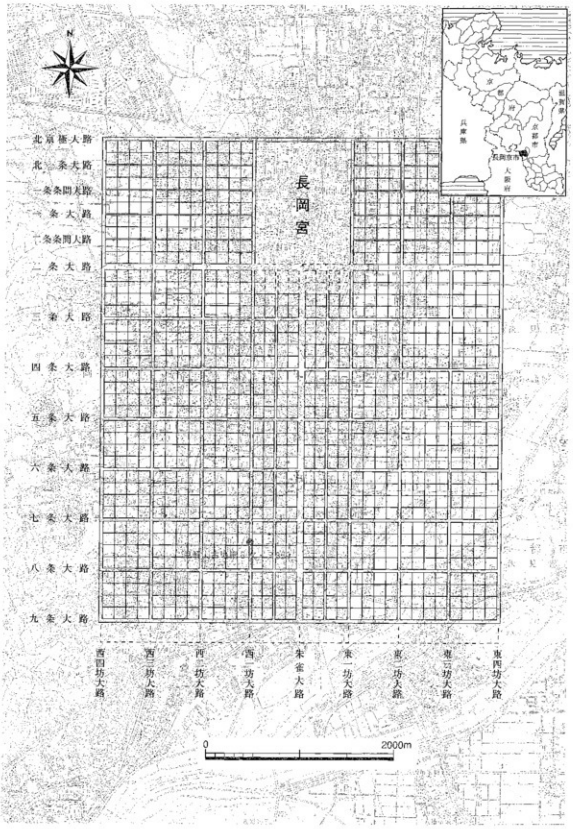
7．本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標系の第Ⅵ系を使用した。

8．本書挿図の土層名で＜＞を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のＪＩＳ表記法による土色である。

9．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

10．遺物写真は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。また、地中探査、現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。

11．本書の執筆は、「３．地中探査」を金田明大（独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所）・西村　康（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）、「５．出土遺物」（１）（２）を山本が、前記以外を中島が担当した。全体の編集は中島が行った。



第1図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本 文 目 次

1 はじめに …… 1

2 調査経過 …… 2

3 地中探査 …… 4
（1） 探査の目的 …… 4
（2） 探査の方法 …… 4
（3） 探査の結果 …… 4
（4） 終わりに …… 11

4 検出遺構 …… 12
（1） 調査区の設定 …… 12
（2） 第1区 …… 12
（3） 第2区 …… 20

5 出土遺物 …… 21
（1） 第4次調査の出土遺物 …… 21
（2） 第5次調査の出土埴輪 …… 23
（3） 第6次調査の出土遺物 …… 26

6 まとめ …… 30

図 版 目 次

巻頭図版１　（１）第１区の後円部・前方部・造り出し・周壕（西から）
（２）第１区の後円部・前方部・造り出し・周壕（北西から）
巻頭図版２　（１）第１区造り出し北辺の基底石列（北東から）
（２）第１区造り出し北辺の基底石列（東から）
（３）第２区の後円部・周壕（西から）

恵解山古墳第６次調査・右京第859次調査

図版１　（１）第１区の転落石検出状況（西から）
（２）後円部の転落石検出状況（北西から）
（３）造り出しの転落石検出状況（東から）
図版２　（１）第１区の後円部・前方部・造り出し・周壕（西から）
（２）後円部・前方部・造り出し・周壕（北から）
（３）後円部・前方部・造り出し・周壕（南から）
図版３　（１）後円部の地山斜面（西から）
（２）推定くびれ部の検出状況（南から）
（３）前方部・造り出し接続部（北西から）
（４）造り出し接続部付近の葺石（北西から）
（５）造り出し北辺の基底石列（西から）
（６）造り出し北辺の基底石列（東から）
図版４　（１）造り出し接続部内側の石列（南東から）
（２）造り出し接続部内側の石列（北から）
（３）造り出し・前方部接続部の断ち割り（北東から）
（４）推定くびれ部・前方部盛土の断ち割り（北西から）
図版５　（１）第２区の転落石検出状況（西から）
（２）第２区の後円部・周壕（西から）
（３）第２区の後円部・周壕（南東から）
（４）第２区調査前の状況（西から）
（５）第２区埋戻し作業風景（東から）

恵解山古墳第４次調査・右京第783次調査の出土遺物
図版６　（１）第４次調査出土埴輪
　　（２）第４次調査出土遺物

恵解山古墳第５次調査・右京第827次調査の出土遺物
図版７　（１）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列１～３・６・７・10・12号埴輪）
　　（２）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列４・５・８・９・11・13・14号埴輪）

恵解山古墳第６次調査・右京第859次調査の出土遺物
図版８　第６次調査出土遺物

挿 図 目 次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii

第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　地中探査作業風景（西から）…… 2
第４図　第１区調査前の状況（北西から）…… 2
第５図　現地説明会（東から）…… 2
第６図　第１区埋戻し作業風景（西から）…… 2
第７図　墳丘測量図と調査区配置図（1/1000）…… 3
第８図　各測定区の探査成果（1/1000）…… 5
第９図　Ａ測定区平・断面図…… 6
第10図　Ｂ測定区平面図…… 6
第11図　Ｃ測定区平・断面図…… 8
第12図　Ｄ測定区平・断面図…… 8
第13図　Ｅ測定区平面図…… 10
第14図　後円部頂上測定区平・断面図…… 10
第15図　第１区土層図（1/100）…… 13
第16図　第１区転落石密集範囲図（1/200）…… 13
第17図　第１区検出遺構図（1/100）…… 15
第18図　第１区後円部・くびれ部・造り出し土層図（1/100）…… 15
第19図　第１区葺石実測図（1/50）…… 17・18
第20図　前方部・造り出し接続部実測図（1/50）…… 19
第21図　西側造り出し復原図（1/200）…… 19
第22図　第２区検出遺構図・土層図（1/100）…… 20
第23図　第４次調査出土埴輪実測図（1/6）…… 21
第24図　第４次調査出土遺物実測図（1/4）…… 22
第25図　第５次調査円筒埴輪列出土埴輪実測図（1/6）…… 23
第26図　第６次調査出土遺物実測図－１（1/4・1/6）…… 26
第27図　第６次調査出土遺物実測図－２（1/6）…… 27
第28図　家形埴輪裾台と蓋形埴輪受け皿部の裏面…… 29
第29図　第６次調査の遺物出土量・遺物分布図（1/200）…… 31

付 表 目 次

付表－1　第５次調査円筒埴輪列出土埴輪一覧表 …… 24
付表－2　報告書抄録 …… 32

1　はじめに

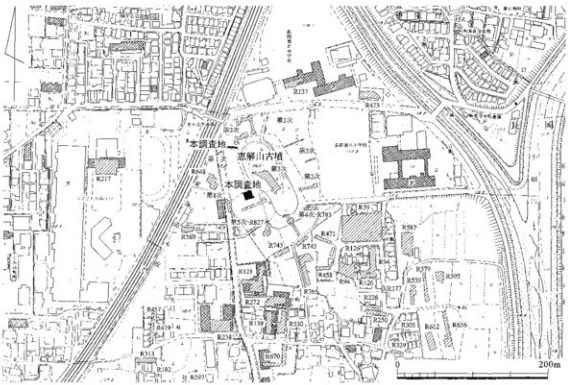
1　本報告は、京都府長岡京市勝竜寺1203-3他において実施した恵解山古墳第6次調査および長岡京跡右京第859次調査に関する概要報告である。

2　調査は、国史跡に指定されている恵解山古墳の墳形とその規模を明らかにすることを主眼におき、併せて長岡京跡右京八条二坊二町および南栗ケ塚遺跡に関する資料を得ることを目的とした。調査面積は142㎡である。

3　地中探査は、奈良文化財研究所の金田明大、高橋克壽、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所の西村　康が行った。

4　調査では、大塚初重（元明治大学）、中尾芳治（元帝塚山大学）、都出比呂志（元大阪大学）、和田晴吾（立命館大学）、杉原和雄（大阪国際大学）、増淵　徹（京都橘大学）、菱田哲郎（京都府立大学）、森下章司（大手前大学）、高瀬要一・高橋克壽（奈良文化財研究所）、西口和彦（兵庫県教育委員会）、山口　博・肥後弘幸（京都府教育委員会）、平良泰久・橋本清一（山城郷土資料館）、丸川義広・山本雅和（京都市埋蔵文化財研究所）、桐山秀穂（古代学協会）、小泉裕司（城陽市教育委員会）、中塚　良・梅本康広・中島信親（向日市埋蔵文化財センター）、古閑正浩（大山崎町教育委員会）、廣瀬　覚（立命館大学講師）の各氏より種々の御教示を得た。橋本氏には葺石石材の分析を依頼した。また、中山志伝氏からは数々のご高配を頂いた。

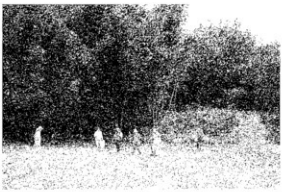
5　本報告は、先年度までと同様に概要を記し、総括的な報告は最終年度以降に行なう予定である。なお、本書には、必要により第4次調査および第5次調査の出土遺物の一部を掲載した。



第2図　発掘調査地位置図（1/5000）

2　調査経過

恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された全長120mを超える前方後円墳であり、桂川右岸域で最大級の規模を誇る。恵解山古墳では、1925（大正14）年に梅原末治による踏査[1]、1968（昭和43）年に京都府教育委員会の墳丘測量調査が行なわれ、1975（昭和50）年からは、長岡京市教育委員会による発掘調査が5回実施されている[2]。特に1980（昭和55）年の第3次調査は、前方部から鉄製武器などを大量に埋納した施設が発見されたことで全国的な注目を集め、翌年の国史跡への指定と、それ以降の指定域公有化への契機となった。そして、2002（平成14）年度に史跡指定域の公有化が完了し、2003（平成15）年からは史跡整備に向けた古墳の基礎資料を得るための発掘調査が行われ、今回の第6次調査が3年度目にあたる。

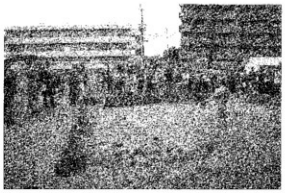


第3図　地中探査作業風景（西から）

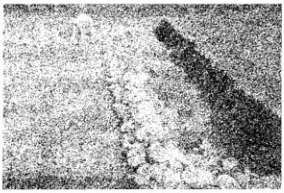
第4図　第1区調査前の状況（北西から）

本調査では、2005（平成17）年7月22・23日に、奈良文化財研究所の協力を得て地中探査を行った。発掘調査区は、地中探査の成果を検討した上で、第5次調査で確認された西側造り出しの北辺部からくびれ部に第1区、後円部の北西に第2区を設定した。第1区は正方形に近い調査区で約112㎡、第2区は長さ約15mの細長い調査区で約30㎡を測る。

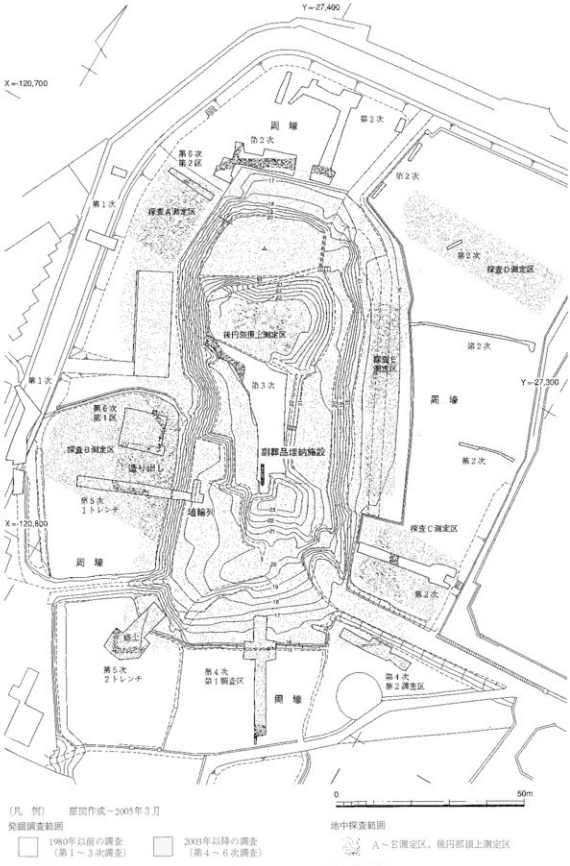
調査は9月20日に重機で表土、耕作土、床土を除去し、以下を人力によって掘削した。両調査区ともに周壕部で葺石の転落状況を検出し、第1区では前方部から造り出しの基底石を確認することができた。10月17日に写真測量を行い、10月22日には現地説明会を開催し調査成果を一般に公開した。その後、転落石、葺石および基底石の保護処置を講じた上で、11月9日に埋め戻しを終えて現地作業を終了した。



第5図　現地説明会（東から）



第6図　第1区埋戻し作業風景（西から）



第７図　墳丘測量図と調査区配置図（1/1000）

3　地中探査

（1）探査の目的

本古墳における探査では、先に第5次調査によって墳丘西側に造り出し部分の存在することが判明していたが、これの規模と形態を探ると同時に、古墳の周囲において周壕の範囲と規模に関する情報を得て、全体の規模を推定することを目的とした。また、後円部頂上においては埋葬施設の存在を探る探査も実施した（第7図）。

（2）探査の方法

探査に際しては、墳丘の外周に沿ってAからEまでの「測定区」を設定して、その範囲を対象に測定した（第8図）。これら測定区は、予め平面直角座標系第Ⅵ系に依拠して設定されていたが、遺跡探査の実例のなかでは希な例といえる。これにより、地形図の中へ探査結果を正確に表示できるので、記録の方法としては理想的であったといえる。しかし、E測定区と後円部墳頂測定区においては探査範囲の制約があり、任意の座標系で探査して、後に平面直角座標へ関連づける方式をとった。なお、実際の測定では必ずしも事前の設定範囲にこだわらず、地形にあわせて測線を適宜延長あるいは縮小した。探査に要した時間は合計2日間である。

本古墳で採用した方法は地中レーダー探査である。使用した装置はアメリカGSSI社製SIR-2P型で、対象地域により200MHz（60㎝角）と400MHz（30㎝角）のアンテナを使い分けた。一般に200MHzなど低い周波数のアンテナは探査深度が深いが分解能は劣る。一方、高い周波数では波長が短いので分解能に優れ、小さな対象物も判別できるが有効探査深度は浅い。近畿地方で一般に見られる水田土壌の場合、400MHzアンテナで約1m強、200MHzで約2～3mの深さが探れるとみられる。

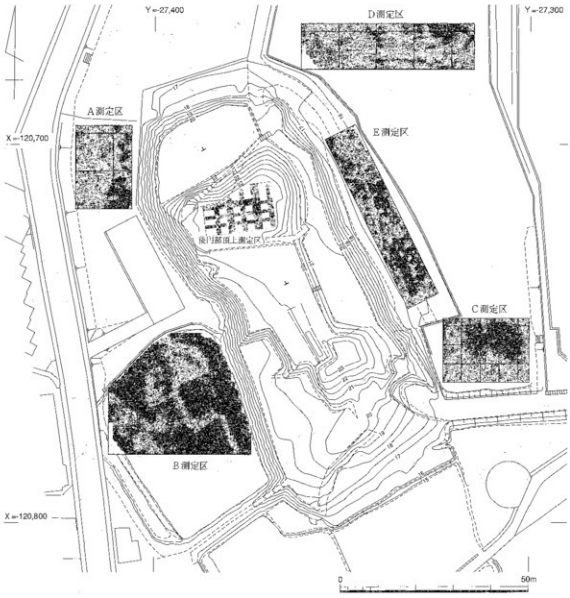
本古墳の場合には、墳丘の外周に沿って探査範囲を設定したが、それぞれの地区おける地形を考慮して、使用するアンテナを選択した。すなわち、例えば北西側で後円部の外周を探ったA測定区では、後世の客土があると推定されたので、200MHzアンテナを使用した。

墳丘の東側では、測定区がゲートボール場やテニスコートなど整地された地面であったので、遺構は深いかも知れないと予想されたが、C～E測定区では高い解像度を求めるために、400MHzアンテナにより探査した。しかし、探査結果を当日に概略処理したところ、有効な結果が得られていないらしいことを認めたので、翌日に200MHzアンテナを用いて追加測定した。

これら再測を含めたいずれの探査地区でも、測定した測線間隔はすべて50㎝で、データの収録時間は60ns（ナノ秒）である。なお、2日間でアンテナを走査した総延長距離は、2種類のアンテナによる重複測定を含めて約8㎞である。

（3）探査の結果

探査の結果は平面図を作成して、それを判読することを基本としたが、平面図のみでは理解が困難な場合には、断面画像（profile）も適宜参考にした。平面図を作成する際には、50㎝間隔の各測線における断面画像の中から、ある一定の深さに対応するデータを取り出す。断面は時間で記



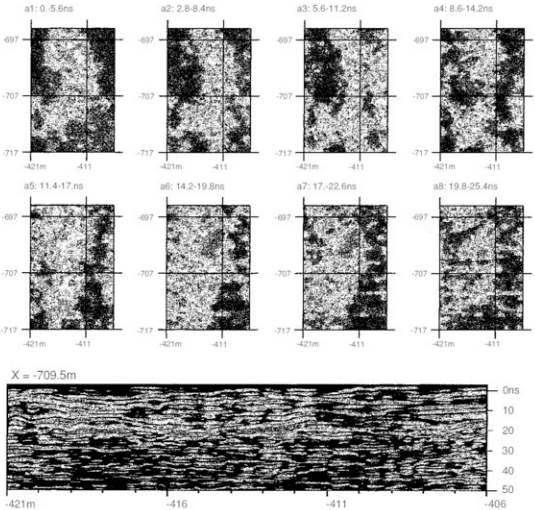
第８図　各測定区の探査成果（1/1000）

録されており、その中からデータを切り取るところから、この方法はタイムスライス（Time Slice）と呼ばれている。これにより、特定の深さにおける電波の反射、屈折、減衰などの挙動の分布をみることができる。平面図作成処理に用いたソフトはGPR-SLICE（参考：http://www.gpr-survey.com/pages/362603/index.htm）である。

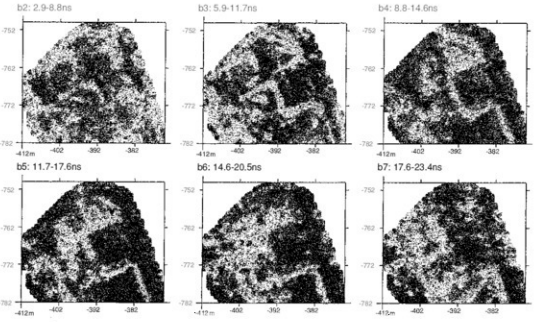
Ａ測定区（第９図）　後円部北西側で周壕あるいは墳丘の限界を探ることを目的とした測定区で、東西15m、南北22mの長方形の範囲である。使用したアンテナは200MHz のみである。

結果を見ると、浅い範囲の5.8－19.8ns、すなわち深さにすると約0.6m程度の深さまでは、東側すなわち墳丘に近い部分で、墳丘を示すような円弧を描く構造が見える。しかし、この円弧は墳丘と見るにはやや径が小さい。また、浅すぎるように思われる。

そこで、断面図を参考にして壕の位置をみると、Ｘ＝－709.5 画像で認められるように、東から５～６m（Ｙ＝－411～－412）あたりから測定区のほぼ西端近くまでの幅約９mほどが、窪んだ



第９図　A測定区平・断面図



第10図　B測定区平面図

構造となっており、これが墳を示すものと推定した。

しかし、この墳と推定する範囲では、電波が減衰する様子を示さず、周囲と比較すると、むしろ反射の大きなことが分かる。通常、墳の部分は土中にあっても水分が多い状態で存在し、電波の減衰も大きい部分として観察されると想像されるが、ここでは反対なのである。後世に墳部分を埋め立てた際に、粒子の粗い砂や礫あるいは塵芥などを含む土が使われたと想像される。

B測定区（第10図）　前方部西側で、先に造り出しの存在が確認された箇所を含む東西38m、南北32mに設定した範囲である。しかし、実際の測定では、東西は現墳丘裾から西側の道路直下まで、南北は北の一段高い地境から造り出しを含むと想定できる限界までを対象としたので、探査範囲は不整形となっている。使用したアンテナは400MHz のみである。

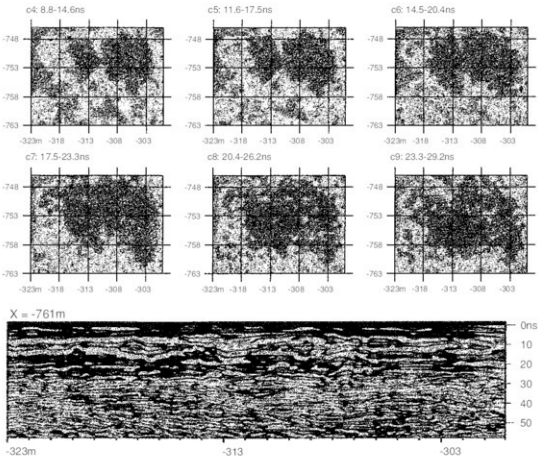
結果を見ると、浅い範囲の6.9－10.8 ns、すなわち現地表面直下より、測定区の東側で造り出しの平面形を明瞭にみることができる。そして墳丘の裾を表す反射の大きな線状構造は、ちょうど現在遺存する墳丘に沿うように北西と南東方向へ延びることが分かる。

造り出し部分における石列は、40㎝よりも深くなると次第にその位置が外方へ広がる。つまり、浅い位置から深い層位へ向かって、傾斜しながら位置がずれる。平面図は遺構をスライスして表示するので、浅い位置では面積が狭いが、深くなると広がっていくのである。そして、最下部に至ると厚みを増すようにみえる。墳の底では、転落石が積み重なったような状態にあると想像されるが、範囲は面として北と西へ広がる。墳底部に堆積した石の散布状況と理解できよう。

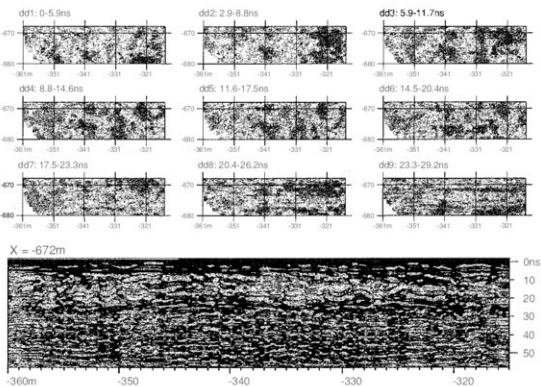
この造り出し部分の西北隅からは、西南の方向へ延びる幅の狭い線状の構造がある。深さは約20～30㎝程度のみで観察することができ、それよりも浅い層位と深い部分でもみえないので、ここを埋めている土壌中にある何らかの変化で、古墳とは関係のないものである可能性がある。しかし、これの起点が造り出しの隅に合致している点からは、遺構である可能性も捨てきれない。

測定区の西辺には、この造り出しや墳丘裾の線と並行しながら、北でやや広くなるような形に存在する線状構造を読みとることができる。墳の西側の限界を示すものと考えられる。これも現地表面直下の6.9－9.5ns から始まるので、遺存する深さは造り出しと同様と思われる。しかし、部分的に途切れる反射の状況からみると、ここにある石の残存状況は余り良くないと推定できよう。本測定区で興味深いのは、発掘調査によれば造り出しを構成する斜面の石の存在状況は、それほど明確でない。すなわち、葺石である石と、それを覆う土壌中の石とは、サイズの上では大きな差異はなく区別がつきにくい。しかし、レーダー探査では明瞭にみえる。これは、今回のアンテナが放射する電波の波長では小さな石を捉えることができず、土砂と一体のものとして記録したことが原因と思われる。一定の大きさを越える石からのみ、大きな反射を得たため、結果として葺石のみが明瞭にみえる状況となったと推測する。

C測定区（第11図）　前方部墳丘の東辺部と周濠が存在すると想定される部分で、東西23m、南北17mに設定した測定区である。測定区の東辺は東にある学校の校庭との間にある段差まで、西は古墳の境界をつくる鉄製ネットフェンスの至近距離までを探査した。ゲートボール場である現地表面は、これを造成するために整地がなされ硬くしまった状態にあるようにみえた。



第11図　C測定区平・断面図



第12図　D測定区平・断面図

本測定区においては、最初に述べたように400MHz アンテナによる測定では、十分な結果を得ていないと思われたので、200MHz アンテナによる測定を追加したものである。ここでは、その200MHz アンテナによる結果を報告する。

平面図による結果では、深さ約0.2～0.3m程で、暗渠と思われる線状の構造がみえる。それは、北から南へ直線的に延びる基幹と、一定間隔でそれから東南と西南の方向へ分岐する部分とで構成されている。ゲートボール場を整備した際に建設された設備と思われる。

古墳の前方部と墳に関連する構造としては、測定区の西辺にある反射の大きな範囲が墳丘を表すものと考えられる。平面図では、墳丘裾の線が必ずしも明瞭でないが、その範囲が西北から東南の方向へ拡大する状況は、前方部とみなしても不都合がない。

これを確認するために断面画像を点検すると、これよりも深い約0.8mほどでも上層でみたのとほぼ同様の位置に、墳のように窪む構造がある。どうやら、これが実際の遺構であり、上層の墳状にみえる変化は偶然の一致か、下層の遺構が影響して生じた土壌変化と思われる。可能性として、墳の上部が埋め立てられたのは古い時代で、その後に現代の整地がなされたと考えられる。

断面画像によると、墳の幅は15m弱の規模と読みとれる。埋没している墳の肩から底面までは約50～60㎝程度の深さと思われる。この推定幅が妥当かどうかは、他の位置における発掘調査や探査の結果を照合しながら考える必要があるだろう。

なお、測定区の東辺にも反射の大きな範囲が狭いながら南北へ延び、同様の反射が見られる西辺との間が、あたかも墳を表すようにみえる。しかし、この反射異常の範囲は、東側の校庭を造成する際に生じた何らかの土壌変化に起因するもので、遺構を反映するものではないと考えた。

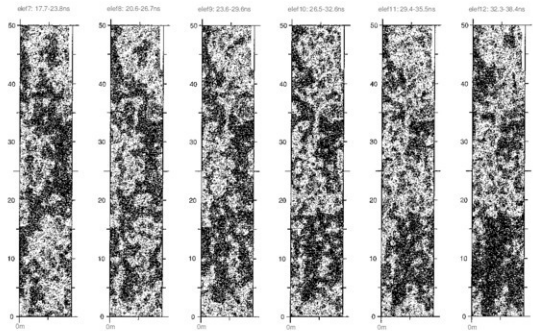
D測定区（第12図）　周墳を探ることを目的として、東西に細長く試掘トレンチのような要領で設定した測定区で、東西45m、南北12mの範囲である。対象範囲のほとんどはグランドで一部テニスコートをまたぐが、C測定区と同様に硬く乾燥した地表面であった。後円部に近い西辺には僅かながら草の生える部分を含む。ここでは、200MHz アンテナを使用した測定のみである。

まず、断面図をみると、15ns 程度の深さ、すなわち地表面の反射が他よりも大きいことに気がつく。ゲートボール場よりも強固な地固めがなされているようにみえる。平面図として整理した結果では、墳丘裾あるいは墳らしき構造を認めることができない。強いてあげると、測定区の西端に近い箇所で、南へ傾斜しながら下がる構造がみえるので、これが墳丘裾を表しているのかも知れない。しかし、北側で浅くなるはずの墳の痕跡がみえない。

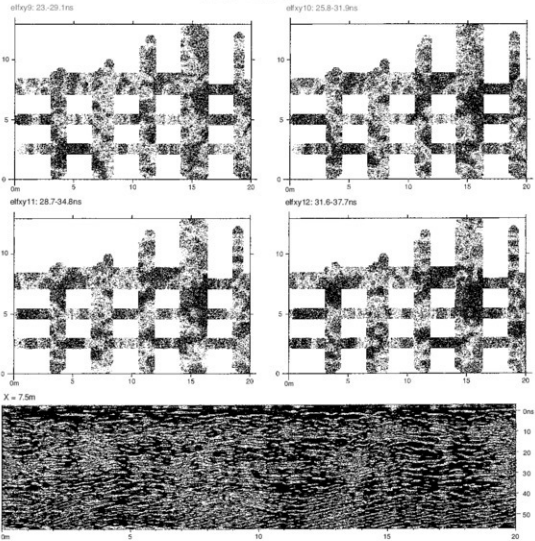
ここでは、探査で十分な地下情報が得られていない可能性もあるが、墳が存在しないかも知れない点も、考慮しておく必要があろう。

E測定区（第13図）　本測定区は墳丘東側のくびれ部および造り出し部が存在すると想定される位置で、南北方向に細長く設定した範囲である。東西９m、南北50mの範囲内は、砂利敷きの園路と草地からなっている。すなわち、地表面の状況が部分的に異なるので、これが探査データに影響すると予想された。

結果をみると、測定区の中央付近より南半部では電波が減衰するが、それより北側ではそれが



第13図　E 測定区平面図



第14図　後円部頂上測定区平・断面図

みられない。北半部の反射の大きい部分が、あたかも後円部の裾を表すようにみえるのである。そこで、結果を地形図のなかへ表示して、位置関係を検討することにした。

地形図のなかへおき、電波の反射状況を詳細にみると、深さ約0.6m程度から東側へ湾曲する曲線があり、それは1m程度と深くなるほど明瞭かつ幅広くなることに気がつく。これは、後円部の裾を限る石列の線で、上層では石の表面を捉えているが、それが深くなるに従って、次第に石全体からの反射を得た結果、幅が広くなると理解できよう。後円部の形状を表すにしてはやや不正形であるが、位置的には不都合がない場所にあるのである。

後円部頂上測定区（第14図）　ここで探査の対象とした範囲は墓地であった。そこで、各々の墓地区画の間の幅狭い通路を利用してアンテナ走査をする必要があり、したがって、通常の測定のように測線の各々を一定間隔に設定することはできなかった。また、ときには墓地を区画する縁石に沿わせるような形でアンテナを走査したので、その石からの側面反射がノイズとして加わると予想された。探査範囲として設定できたのは東西20m、南北13mである。

結果を示す平面図には空白が多く、したがって判読を困難にしているが、それでも大局的にみると、測定した範囲のほぼ中央で、北で西へ傾いた長方形の構造がみえる。東西10m、南北５m程の範囲なので、墓坑と見なしても良いと考えた。この範囲が、ちょうど古墳の主軸と直交するらしき方位を取る点は、非常に興味深いと指摘しておきたい。

この範囲の中央を横断する断面をみると、埋葬施設をつくると思われる窪んだ構造がある。断面がこの構造を斜めに縦断していることを考慮すると、長さとしては８m以内と推定される。石を表すような反射状況がないので、粘土郭のような材質を考えた方がよいだろう。

しかし、この埋葬施設と思われる構造は、現地表面から約0.7m程の深さである。墳丘の削平をどの程度と見なすかによるが、この深さが妥当であるかどうか、考古学的な検討が必要であろう。

（４）おわりに

本古墳の周辺で、その規模と形態を探ることを目的とした探査の結果は以上である。それぞれの測定区では、地表面の状況と遺構が存在する深さに差があるらしく、得られた結果が大きく違った点が興味深い。

すなわち、最も良好な成果が得られたＢ測定区では、遺構は極めて浅い位置に存在しており、したがって、十分強度が大きくかつ明瞭な電波の反射信号を受信することができた。これが良好な成果が得られた要因であったといえよう。

他の墳丘と壕を探ったすべての範囲では、Ｂ測定区のような明瞭な結果が得られなかった。これは、主として厚い客土が原因と思われる。しかし、遺構の位置や構造を明確に指摘できなかった測定区でも、もし、30ns すなわち約0.9mよりも深い層位に着目して検討すると、どうやら遺構が読みとれそうである。つまり、これらの測定区のいずれでも、最近に客土をしたことを前提にして上層を除外すれば、判読できる可能性が残されている。

しかしながら、先に述べたようにＤ測定区では壕の構造を読み取るのが難しい。この測定区では、探査した範囲内に壕が存在しない可能性も顧慮しておく方がよいだろう。

4　検出遺構

（1）調査区の設定

恵解山古墳の墳丘は、古墳築造時の旧表土層の上に盛土を積み上げて構築し、傾斜面には葺石を施している。第3次調査で発見された埋納施設が墳丘中軸上にあると仮定した場合、古墳の主軸は真北に対して約30°西に振る方位を示す。恵解山古墳の現況は、見かけ上北西から南東方向に細長い小山状を呈しており、鬱蒼とした竹藪に覆われ段築などを窺うことはできない。第4次調査では前方部前面の東半部が、第5次調査では、前方部前面の西端、西側の造り出しと、前方部の埴輪列が検出され、本来の墳丘は前方部の東西側面が現状より一回り大きいことが明らかとなってきた。このため、第6次調査の対象となった平坦地では、最下段の斜面や平坦面が削平されているものの、古墳の基底部は地表下に埋没していることが予想されていた。

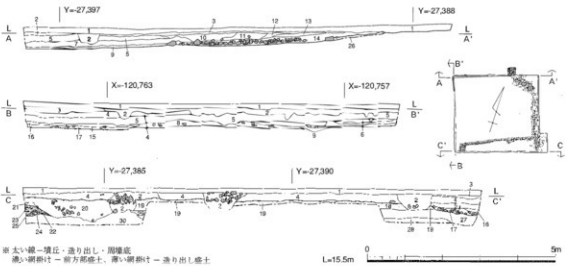
第6次調査の主要な目的は、第5次調査で確認された西側造り出しの形態、規模を明らかにすることと、これまで情報量が乏しかった後円部の解明につながる成果を収めることであった。第1区は、造り出しが検出された第5次調査第1トレンチの北側にあたり、地中探査のB測定区に相当する（第7図）。この測定区では、特に良好な探査成果が得られており、その成果は調査区の設定だけでなく、調査作業全体の効率化に寄与することになった。第1区は、想定された西側造り出しの北辺部からくびれ部、そして後円部にかけて、前方部の墳丘裾に沿う方向に設定している。一方、後円部北西側の第2区は、地中探査のA測定区にあたる。ここでは、後円部北側の第2次調査で葺石の転落状況が確認されているが、後円部の裾が明らかでなかったため、調査区の方向は任意のものとした。なお、調査区中心の国土座標値は、第1区がY＝－27,391、X＝－120,758、第2区がY＝－27,413、X＝－120,696である。

（2）第1区

A．周壕

第1区を設定した平坦地の現地表面は、標高15.6m前後を測る。耕作土・床土の下には、近世頃の耕作土である淡茶灰色弱粘質土（第15図第4層）がある。第4層が後述する造り出しを覆っていることから、造り出しは少なくとも近世頃に削平され埋没したものと考えられる。周壕埋土は第5～17層であり、その厚さは0.25～0.45mを測る。茶灰色系の第5・10～13層（上層）と、灰褐色系の第6～9・14～17層（下層）に大別でき、埴輪片とともに上層に中世の遺物、下層には長岡京期～平安時代の遺物が少量含まれていた。埋土には上層を中心に粘質土層が認められるが、水を湛えた状況は窺えず、耕地化されるまで湿地状の土地条件であったと考えられる。

上層を完全に除去した段階で、周壕内には転落した葺石が確認されるが、転落石は地中探査で想定された後円部、前方部、造り出しの輪郭に沿って、幅1.7～3mの帯状に密集していた（第16図）。転落石の大きさは拳大程度が大部分を占めるが、なかには人頭大のものも認められる。第14・17層は転落石を含む砂質土層で、原位置を保つ葺石の直上に堆積する。周壕埋土の出土遺物は、古墳に伴うものを除外すれば長岡京期以降に限られることから、この時期以降に墳丘の人為

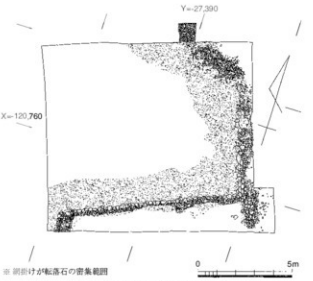


1　淡灰黄色弱粘質土（砂質強し）<10YS/1> －耕作土
2　－撹乱溝・撹乱域埋土
3　淡黄灰色弱粘質土（確混じり）<7.5YR5/1> －床　土
4　淡茶灰色弱粘質土<5YR6/1>
5　暗茶灰色弱粘質土（確混じり）<5YR4/1>
6　淡灰褐色弱粘質土（砂質強し）<2.5Y4/1>
7　淡灰褐色弱粘質土（粘性強し）<2.5Y4/1>
8　暗茶灰褐色砂礫土<5YR4/1>
9　暗灰褐色弱粘質土（粘性強し）<10YR4/1>
10　淡茶灰色砂質土<7.5YR5/2>
11　淡茶灰色粘質土（確混じり）<7.5YR4/1>
12　淡茶灰白色粘質土<7.5YR6/1>
13　淡灰茶色弱粘質土（確混じり）<7.5YR4/1>
14　暗茶灰褐色砂質土（確混じり）<7.5YR3/1>
15　淡灰黄褐色砂礫土<7.5YS/1>
16　暗茶灰褐色弱粘質土<7.5YR4/1>
17　暗灰褐色砂質土（確混じり）<2.5YR4/1>
18　暗灰色砂礫土<5YR5/1>
19　淡灰茶色弱粘質土（確混じり）<10YR5/1>　＞造り出し盛土
20　－前方部・造出し接続部埋土
21　濁淡灰褐色弱粘質土（確混じり）<7.5YR5/1>
22　濁淡茶灰色粘質土（礫、白色土混じり）<7.5YR5/2>
23　暗黒褐色粘質土<N2/0>
24　淡黒灰褐色粘質土<2.5Y5/1>
25　淡灰白色粘質土（確混じり）<N6/0>
26　淡灰色砂礫土<10YR4/1>
27　暗灰黄色砂礫土<5YR4/1>
28　暗黄灰褐色砂礫土<5YR3/6>　＞地　山
29　淡灰褐色砂礫土<7.5YR4/1>
30　明淡橙色砂礫土<7.5YR3/4>

第15図　第１区土層図（1/100）

的な改変が行われたものと想定できる。

周壕底面の状態は、第４・５次調査と同じくほぼ平坦であった。しかし、微細に見れば後円部の周辺が最も高く、南西方向への緩やかな傾斜が認められる。また、前方部と造り出しの接続部北西側では溝状の窪みが確認できた（第17図）。第１区の周壕底面は標高14.92～15.25mを測るが、これまでの調査で確認された周壕底面の標高は、後円部北西側の本調査第２区（14.96～15.28m）、本調査第１区、造り出し南側の第５次調査１トレンチ（14.88～15.00m）、前方部南西隅の第５次調査２トレンチ（14.73～14.84m）、前方部中央南の第４次調査第１調査区（14.45～14.60m）、前方部南東の第４次調査第２調査区（14.30～14.60m）であり、北西から南東へ向かって低くなっていることが分かる。最も高い本調査第２区の推定後円部裾と第４次調査第２調査区の前方部基底石付近の比高差が約0.7m（２点間の直線距離は約130m）であることから、周壕には大きな段差や堤は設けられていなかったと考えられる。



第16図　第１区転落石密集範囲図（1/200）

B．後円部

調査区の北東隅では耕作土直下に削平された地山面が表れ、北辺部では採査成果と符号するように多量の転落石が確認されたため、後円部裾が良好な状態で遺存しているものと期待された。しかし、調査区内では後円部裾の基底石を確認することができず、転落石の下に緩やかな地山の斜面を検出しただけであった（第18図）。地山斜面は周壕底面との境界が明瞭でなく、約8°の傾斜角で調査区北東隅の削平された地山面に至っている。後円部北西側の本調査第2区における検出状況も同様であり、これまでの前方部の成果と比較すれば、少なくとも後円部西側は墳丘裾の構築状態が前方部とは異なっていたと考えられる。地山削り出しで基底石・葺石を施さない斜面を「基壇」として評価すべきか否かは、今後の重要な調査課題である。なお、この地山斜面の裾については、標高15.20～15.25m付近に想定できる。

C．くびれ部

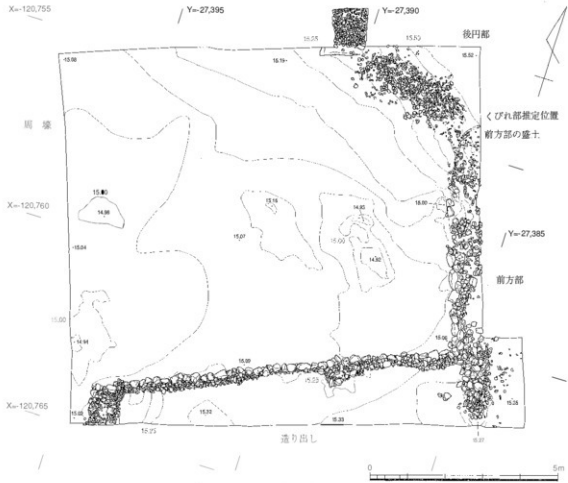
後円部の基底石を確認できなかったため、くびれ部の位置を明らかにできなかった。しかし、後円部想定範囲における転落石や地山斜面の状況、そして、後述する前方部の盛土範囲などから、現段階では調査区北東隅から南へ2.1m付近にくびれ部を推定している（第17図）。

D．前方部

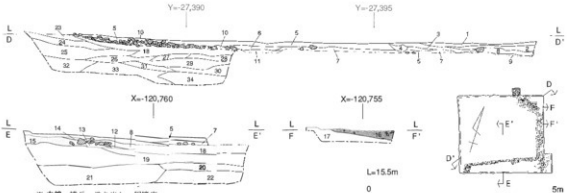
これまでの調査で前方部の裾部は周壕底とほぼ同じ高さから盛土を施し、その前面に基底石を据えていることが明らかとなっていたが、本調査区では前方部の盛土が後円部の地山斜面と接続する状況を確認できた。恵解山古墳の築造に際して、まず、後円部の円弧に相当する地山斜面が削り出されたと想定できるが、地山の削り出しは前方部との接合部で止まらずに、さらに墳丘内側にまで至っている。そして、前方部では、地山を削り出した範囲に黒灰色系の粘質土を盛って裾部を形作り、その前面に基底石を配置し葺石を施したものと考えられる（第17・18図）。

前方部の基底石は、造り出しの北側接続部から後円部側へ約4mの位置までを確認した。基底石列の方向は真北から西へ17°振っているが、くびれ部付近では石列がやや墳丘側へ湾曲していた。後円部、くびれ部に近い位置の基底石は、より高い位置に据えられていたため、後世の削平によって失われたと考えられる。前方部の基底石には、長辺0.2～0.55m、短辺0.15～0.25mの亜角礫が利用されており、長側辺を周壕側に向けて据えられている。造り出し接続部から約1m北までは、基底石の上に大振りの石材が重ねられ、あたかも2段積みのような状況を呈している。なお、北から3・4石目の基底石は後世の窪みに落ち込んでおり、本来の位置から周壕側へずれた状態で検出された。

葺石は、基底石の設置面から最大で0.4m上までを残すだけであった。また、その検出状態はやや乱れており、本来の位置を保つ範囲は限られている。造り出し接続部付近では、葺石の傾斜角度が15°前後を測るが、計測範囲や遺存状況などに制約があり、この傾斜角度のまま立ち上がるか否かを明らかにできなかった。葺石は亜角礫で拳大より一回り大きいものが多数を占めるが、なかには人頭大に近いものも認められ、人頭大石材の周辺には区画石列の存在も想定しなければならない（第19図）。



第17図　第１区検出遺構図（1/100）



※赤囲い墳丘・造り出し・周壕底
薄い網掛け－造り出し盛土、濃い網掛け－前方部盛土

1　淡茶灰色弱粘質土＜5YR6/1＞
2　暗茶灰色弱粘質土（礫混じり）＜5YR4/1＞
3　暗黄灰色弱粘質土＜7.5YR6/2＞
4　暗黄灰色弱粘質土（礫混じり）＜7.5YR6/2＞
5　淡茶灰褐色弱粘質土＜5YR6/1＞
6　暗灰褐色弱粘質土＜7.5YR4/1＞
7　淡灰褐色砂礫土＜7.5Y5/1＞
8　淡灰黄褐色砂礫土＜7.5Y5/1＞
9　暗灰褐色砂質土（礫混じり）＜2.5YR4/1＞
10　暗茶灰褐色砂質土＜2.5YR4/1＞
11　淡灰褐色砂質土＜5Y5/1＞
12　暗黄灰色砂質土＜10YR5/1＞
13　暗黄灰褐色砂質土（礫混じり）＜10YR4/1＞
14　淡茶灰色砂礫土＜5YR6/1＞
15　淡灰茶色弱粘質土（砂礫混じり）＜10YR5/1＞　＞造り出し盛土
16　淡黒灰色粘質土（礫混じり）＜7.5YR2/1＞－前方部盛土

17　淡青黄灰色砂礫土＜2.5Y7/2＞
18　淡茶灰色砂礫土＜10YR6/2＞
19　暗茶褐色～淡茶灰色砂礫土＜7.5YR4/3＞
20　淡茶灰色砂礫土＜7.5YR4/2＞
21　淡茶黄褐色砂礫土＜7.5YR4/3＞
22　暗黄褐色砂礫土＜7.5YR4/6＞
23　淡灰黄色砂質土＜5Y5/2＞
24　淡灰黄色砂礫土＜5Y5/2＞
25　淡黄褐色砂礫土＜10YR5/4＞
26　暗青灰色シルト（礫混じり）＜2.5Y6/1＞
27　淡黄灰色シルト（礫混じり）＜2.5Y6/3＞
28　淡灰褐色シルト＜10YR6/1＞
29　淡灰色砂礫土＜7.5YR4/1＞
30　暗灰褐色シルト＜10YR5/1＞
31　淡青灰色シルト（礫混じり）＜2.5Y5/2＞
32　淡茶褐色砂礫土＜7.5YR3/2＞
33　淡灰茶色砂礫土＜10YR4/1＞
34　暗黄灰色砂礫土＜2.5Y4/2＞
地山

第18図　第１区後円部・くびれ部・造り出し土層図（1/100）

E．西側造り出し

西側造り出しの北辺を画する基底石、葺石と、やや不明瞭ではあるが西辺の葺石を検出した。第５次調査では、造り出しが地山を削り出したものではなく、盛土によって形成されていることが明らかとなっている。本調査区でも灰色系砂礫混じり土の盛土を確認しているが、盛土の厚さは0.2～0.3mで、造り出しの下部には周壕底の地山面がほぼ水平に続いていた（第18・21図）。

造り出しの北辺は、推定くびれ部から約６m前方部寄りに接続する。前方部と造り出し基底石の接続角度は95°で直角に近いが、造り出し北西隅は隅部処理のためか約105°を測る（第19図）。造り出しの規模は、南北長が第５次調査１トレンチと本調査区との基底石間で12mを測る。しかし、この値は第５次調査の断ち割り部分に対応する位置のもので、前方部との接続部で計測すれば12.5m程度に復原できる。また、周壕への張り出しは、前方部の延長線上から西辺までの復原幅で9.7mを測る。造り出しの高さは、周壕の底面から0.3mまでで、本来の高さを明らかにする情報は得られなかった。ただ、西辺の状況を見れば、造り出し斜面が基底石から直線的に立ち上がるのではなく、緩斜面を経て平坦面へ至る構造も想定しなければならない（第21図）。

北辺の基底石列は真西に対して22°南へ振る方向に連なっている。基底石には砂岩が主体として用いられており、少量のチャート、頁岩、粘板岩が含まれていた。前方部のものに比べると一回り小さい石材で、長辺0.25～0.45mのものが多数を占める。主に長側面を外側に向けて据えられているが、部分的に小口を外側に向けるものがあり、石列全体の配置状況は前方部に比べて雑な印象を与える。基底石の設置面は水平ではなく、前方部との接続部から造り出し北西隅に向かって僅かに傾斜していた。

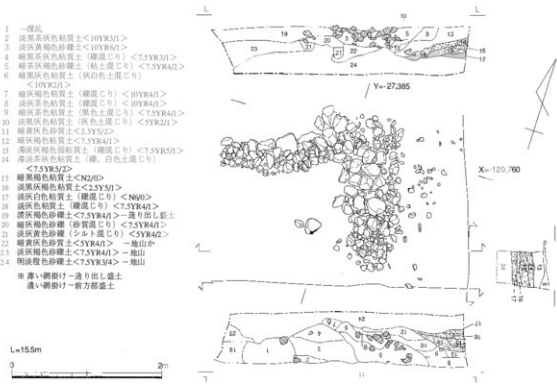
葺石には拳大の亜角礫が利用されているが、部分的に人頭大に近いものや0.05m程度の小礫が含まれていた。前方部との接続部付近など遺存状態が良好な範囲では、石材は小口を外側に向け、盛土斜面に突き刺すように葺かれている。葺石面の傾斜角は20°前後を測る（第19図）。

F．造り出し接続部内側の石列

本調査区では、造り出し接続部分のさらに墳丘側から石列と掘り込み状の土層を確認した。石列は前方部の基底石より内側にあり、接続部分から1.8m南まで続く。また、調査区の南壁付近では石の数が少なくなるものの、掘り込み状の土層がさらに南側へ延びていた。第５次調査では石列が確認されていないが、断ち割り壁面の対応する位置に掘り込み状の土層の変化が認められる。石列には長辺0.15m程度の石材が認められるが、この大振りな石材は接続部から斜め方向に立ち上がった後、前方部裾に合致する方向へ続いていた。石材の配置状況は前方部側、そして、造り出し側から傾斜する造作が窺え、石列部分があたかも谷状を呈している。

断ち割り壁面の断面観察では、掘り込み状の土層（第20図第５～13層）が第14～18層の前方部盛土を切る状況が窺えた。また、石材の隙間には形象埴輪やミニチュア土器が含まれており、この石列部分が谷状の斜面として開口していた可能性を考慮しなければならない。しかし、本調査区では充分に石列の性格を確認できなかったため、石列の評価については、谷状斜面の基底部、暗渠的な構造物、造り出し接続時の造作の三者の可能性を指摘するに止める（第20・21図）。

第19図　第１区葺石実測図（1/50）



第20図　前方部・造り出し接続部実測図（1/50）

第21図　西側造り出し復原図（1/200）

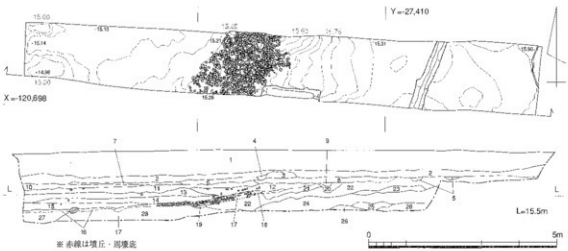
（3）第2区

A．周壕

第2区には盛土が施されており、現地表面の標高は16.6m前後を測る。盛土の下には旧耕作地に関連する土（第22図第2～7層）と、近世頃の耕作土である灰色系の第8～11層がある。第8～11層は第1区第4層に対応するもので、造り出しが削平された段階に後円部の裾も2m程度削られていたことが分かる。周壕埋土は第12～19層であり、第1区より厚く0.45～0.55mを測る。灰褐～茶褐色の第12～14層（上層）と、茶褐色～黒灰色の第15～19層（下層）に大別でき、上層に中世の遺物、下層には長岡京期～平安時代の遺物が含まれていた。出土遺物には木質遺物が多く、この場所が常に湿潤な状態であったことを示している。上層を完全に除去した段階で、転落した葺石を確認した。転落石は想定される後円部の円弧に沿って、幅2m程度の帯状に密集しており（標高15.20～15.60mの範囲）、拳大程度が大半を占めるが、なかには基底石、区画石に使用されたと推定できる大型の石材も認められる。周壕底面の標高は14.96～15.28mを測り、僅かに西側へ傾斜していた。また、調査区の西端では、底面に2箇所の窪みが認められる。

B．後円部

周壕底面から緩やかに立ち上がる地山斜面と、その斜面を埋める大量の石材を確認したが、原位置を保持する基底石、葺石は検出できなかった。地山斜面は周壕底面との境界が明瞭でないが、標高15.25～15.30m付近から立ち上がり、約10°の傾斜角で東側の削平された地山面に至る。第1・2区の状況から、西側の後円部裾部は葺石を施さない斜面とも考えられ、周壕埋土や斜面上から確認される石材は、さらに上段の斜面からもたらされた可能性がある。



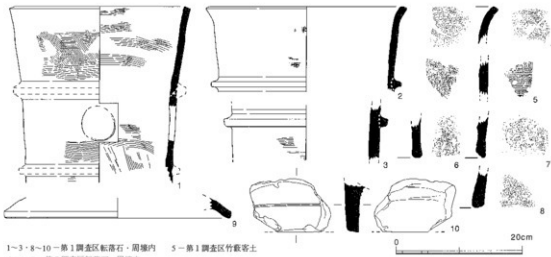
第22図　第2区検出遺構図・土層図（1/100）

5　出土遺物

（1）第４次調査の出土遺物

第４次調査では、第１・２調査区ともに転落石に混じった状態および周濠内から、埴輪や結晶片岩など古墳に伴う遺物をはじめ、須恵器、土師器、瓦器、白磁、土錘、獣歯など長岡京期や中世の遺物が出土している。以下、おもな遺物の概要を説明する。

埴　輪　埴輪は、普通円筒と朝顔形円筒、壺形、それに家形などを確認しているが、大半が破損品であって、全形の窺い知れるものは皆無であった。また、全体的に摩滅しているものが多くを占め、調整技法などが分かる例も乏しかった。１～８は普通円筒埴輪と考えられる破片である。１は、口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる形態で、口径は28.9cmほどに復元できる。突帯は剥離していたが、断面が台形を呈する突出度の大きくないものを貼り付けていたと考えられる。突帯の間隔は約13cm程度、最上段（口縁部）の高さは11.8cmである。透孔は、直径が約5.4cm前後に復元される円形で、上から２段目に施されていた。外面の調整は、１次調整にナナメハケを施した後、２次調整としてヨコハケを施して仕上げている。ヨコハケは、工具を止めながら連続して施すB種に分類されるものであるが、静止の痕跡はあまり明瞭ではなかった。内面は、ヨコハケとナデによって調整している。焼成は良好であるが、黒斑が広範囲に認められた。第１調査区の転落石を除去した地山面上から出土した。２は、１とは異なり、端部近くで緩やかに開く口縁部をもつ形態で、口径は32cm、最上段（口縁部）の高さは11.2cmに復元できる。全体に摩滅しているため、調整技法は不明瞭であるが、外面にタテハケとヨコハケ、内面にはナデの痕跡が僅かに残っていた。黒斑が認められ、第１調査区の８区から出土。３は体部の破片で、最大径は約23.6cmである。全体に摩滅しているため、調整技法は不明瞭であるが、外面にヨコハケの痕跡を僅かにとどめている。第１調査区の８区から出土した。４は口縁部の小片で、端部の形態は２に類似している。外面の調整はナデ、内面にはヨコハケを施して仕上げている。第２調査区の灰褐色粘質土から出土。５は体部の小片で、外面はタテハケの後にヨコハケが施されており、黒斑が認めら



1～3・8～10－第１調査区転落石・周壕内　5－第１調査区竹藪客土
4・6・7－第２調査区転落石・周壕内

第23図　第４次調査出土埴輪実測図（1/6）

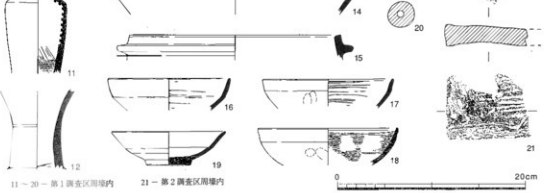
れる。第１調査区の竹藪客土から出土した。６～８はいずれも底部片であるが、小片であるため、底径を復元することはできなかった。外面の調整は、１次調整としてタテ（ナナメ）ハケの痕跡をとどめているのみで、２次調整は施されていない。内面はナデ調整して仕上げており、６・７は第２調査区、９は第１調査区から出土した。

９は壺形埴輪の鍔部と考えられ、復元径は約36cm前後を測る。鍔は断面形が平行四辺形を呈し、水平方向ではなく、先端がやや下方を向くように貼り付けられており、突出度は約3.5cmであった。

10は家形埴輪の破片で、平坦面に沈線が１条施されている。第１調査区の周壕内から出土した。

長岡京期・中世の遺物　11～13・20・21は、長岡京期と考えられる遺物で、いずれも第１調査区から出土した。11は須恵器の壺Ｇである。体部内面に絞り目の痕跡をとどめており、口径6.3cm、肩部の径6.4cm、現存高は約13.5cmである。12は須恵器の長頸壺の頸部片で、中位に浅い沈線が１条巡らされており、内外面には自然釉が薄く付着している。13は土師器の皿Ｂで、口径27.8cm、器高3.2cmに復元できる。口縁部が屈曲し、端部は肥厚させて丸く収めている。端部に油煙の痕跡が認められたことから、灯火器に転用されたものと考えられる。底部には、断面三角形の低い高台を貼り付けており、径は約22.6cmある。20は紡錘形の土錘で、土師質に焼成されている。長さ約6.2cm、最大径2.9cmあり、孔径は0.7～0.9cmほどある。21は平瓦の破片である。瓦質に硬く焼成されており、凸面には縄タタキが、凹面には布目の圧痕をとどめている。

14～19は中世の遺物で、すべて第１調査区の周壕内から出土したものである。14は東播系の須恵器鉢で、口径は26.2cmに復元できる。口縁部が外上方に大きく開く形態で、端部は玉縁状に肥厚させ、重ね焼きの痕跡をとどめている。15は瓦器の羽釜で、口縁端部のすぐ下に断面が台形を呈する低い鍔を貼り付けている。口径22.5cmに復元できる。16～18は瓦器椀で、いずれも内面はミガキを加えて調整しているが、外面は口縁部のナデを除いて調整を省略している。口径は13～14.8cmある。19は白磁の皿で、口径12.2cm、器高3.6cmを測る。釉薬は、内面と口縁部外面に施されていて、底部外面は素地のままである。



第24図　第４次調査出土遺物実測図（1/4）

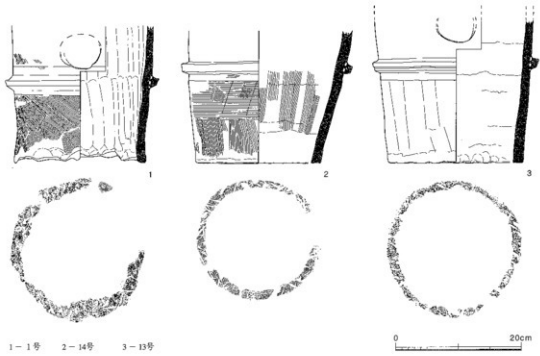
（２）第５次調査の出土埴輪

第５次調査では、第１・２トレンチから普通円筒と朝顔形円筒、それに壺形、家形、蓋形など各種類の埴輪が出土している。特に、第１トレンチの前方部平坦面上において検出した円筒埴輪列では、樹立した状態の埴輪が初めて出土し、注目されることになった。ここでは、第５次調査で出土した埴輪のうち、円筒埴輪列から出土した埴輪（南から１～14号と命名、『長岡京市報告書』第47冊第11図を参照）について、その特徴の概要を説明することにしたい。

形　態　円筒埴輪列の埴輪は、14個体（北側の壁体内にさらにもう１個体あることを確認）が樹立した状態で発掘された。それらの遺存状態をみると、底部はおおむね全周していたのに対して、器高については最も良好なものでも４段目の下半（残存高約41cm）までであって、それ以外は３段目の下半より下が残る程度のものばかりであった（図版７）。外形は、垂直気味に立ち上がるものも少数あるが、やや開き気味に上方へ向かうものが大多数を占めている。ただ、開き気味といっても、口縁部に向かってそれほど広がらない形態になると推察される。

以上見てきたように、全体の形態を知りうる個体はもちろん皆無であり、口径や器高はもとより、突帯の条数などを知りうる個体も存在しない。ただし、全体的なプロポーションや後述する法量などを考慮すると、円筒埴輪列の埴輪は４条突帯の５段構成に復元できるのではないかと推察できる。

透　孔　透孔を確認できたものは14個体中で13個体あり、その形態はすべて円形であった。透孔は、２段目に２孔ずつ開けている例が14個体中で12個体あり、残りの１個体（14号）については残存状態が悪く、透孔の有無が確認できなかったものである。残るもう１個体（12号）につい



第25図　第５次調査円筒埴輪列出土埴輪実測図（1/6）

付表－１　第５次調査円筒埴輪列出土埴輪一覧表

	法量（単位は cm）				外面調整		内面調整	底面の状況	透孔	焼成	色調	胎土	備考
	底部径	底部高	突帯間隔	残存高	１次	２次							
埴輪列１号	21.1	13.2	－	21.8	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕顕著	円形２段目	良好 黒斑有	淡橙褐色	緻密	
埴輪列２号	20.8	13.4	12.6	30.7	ナナメハケ		ナデ ナナメハケ	棒状の圧痕顕著	円形２段目	良好	淡橙褐色	やや粗い	
埴輪列３号	20.1	12.9	11.8	27	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕顕著	円形２段目	良好 黒斑有	淡橙褐色	やや粗い	
埴輪列４号	21.2	15.4	－	25.4		板状ナデ	ナデ	凹凸有り	円形２段目	良好	淡橙色	やや粗い	一部摩滅している
埴輪列５号	20.3	16.2	11.9	29.7	タテハケ	Ｂ種ヨコハケ	ナデ タテハケ	平坦	円形２段目	良好 黒斑有	淡橙褐色	緻密	
埴輪列６号	20.8	13.4	－	22.3	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕	円形２段目	良好 黒斑有	赤橙色	緻密	全体に摩滅している
埴輪列７号	18	13.2	－	18.2	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕	円形２段目	良好	赤橙色	緻密	全体に摩滅している
埴輪列８号	19.9	16	－	23.9		Ｂ種ヨコハケ	ナデ	平坦	円形２段目	良好	淡橙褐色	緻密	
埴輪列９号	19.2	16.4	－	25.7		板状ナデ	ナデ	平坦	円形２段目	良好	橙褐色	緻密	
埴輪列10号	20.4	13.9	12.4	34.7		板状ナデ	ナデ タテハケ	凹凸有り	円形２段目	良好 黒斑有	淡黄褐色	緻密	
埴輪列11号	19.7	16.3	12.6	29.8	タテハケ	Ｂ種ヨコハケ	ナデ	平坦	円形２段目	良好 黒斑有	橙褐色	やや粗い	内面に粘土帯の接合痕有り
埴輪列12号	23.6	13.3	12.2	41	タテハケ	Ａ種ヨコハケ	ナデ	凹凸有り	円形４段目	良好 黒斑有	橙色	緻密	朝顔形円筒埴輪か？
埴輪列13号	21.6	16	－	22.6		板状ナデ	ナデ	凹凸有り	円形２段目	良好	黄褐色	緻密	内面に粘土帯の接合痕有り
埴輪列14号	20	16	－	21	タテハケ	Ｂ種ヨコハケ	ナデ タテハケ	平坦	不明	良好 黒斑有	淡橙褐色	緻密	内面に粘土帯の接合痕有り

ては、２段目に透孔を有しないことは確実で、４段目に穿孔されていることを確認することができた。この個体は、普通円筒ではなく、朝顔形円筒など他の形態の埴輪になる可能性を考慮すべきである。

突帯と底面　突帯の形状は、基本的に断面台形を呈しているものがほとんどであるが、ナデを施す際の強弱によってややM字状を呈しているもの（２号）や沈線が施されているもの（13号）なども認められた。突帯の幅は1.5～２cm前後あり、突出の度合いは比較的小さくて、１～1.5cm程度のものであった。

底部が接地する底面は、基本的に調整を加えておらず、比較的平坦なものと凹凸の認められるものの２者がある。前者には、粘土帯を接合した痕跡や木目状の条線とみられる痕跡などが認められた。一方、後者には棒状のものとみられる圧痕が顕著に認められるもの（１～３・６・７号）

があり、このため底面が分厚く、大きく変形しているものもあった。この圧痕を有する埴輪を後述する法量と外面調整に対応させてみると、底部高（底面と第１突帯上辺までの距離）が13㎝前後のもので、かつ１次調整のナナメハケのみで終わるものに限定できそうである。

法　量　まず底部径についてみると、18～23.6㎝までの範囲に収まり、平均すると20.5㎝ほどになり、法量の分化は認められない。19㎝以下の小さなものが１点（７号）、23㎝以上の大きなものも１点（12号）あり、それらは朝顔形埴輪や形象埴輪など、円筒埴輪以外のものを考慮する必要があろう。特に12号は、先述したように、外形が垂直気味に立ち上がることや透孔が２段目にはなくて４段目にあることなど、他の個体と異なる特徴があることから、その可能性は濃厚といえそうである。

次に底部高についてみると、13.2～16.4㎝の間に分布しているが、13㎝前後を測る一群と16㎝前後のものに集中する傾向が認められた。しかも両者は、それぞれ７個体づつあって、数量的にみても拮抗するという特徴がみられた。

また、突帯間の幅（第１突帯上辺から第２突帯上辺までの距離）が分るものは６個体しかないが、11.8～12.6㎝の間に収まり、平均すると12.25㎝になる。この数値を先述した底部高と比べてみると、13㎝前後の底部高を有するものとは近い値であるが、16㎝前後のものと格差があるといえる。

調整技法　まず外面の調整は、１次調整のタテハケないしはナナメハケを施すのみで終わるものと、さらに２次調整を加えて仕上げるものとに大別することができる。後者は、断続的なヨコハケを施すもの、連続的なヨコハケを施すもの、そして条痕が不明瞭な板状の工具でナデるものなどを認めることができた。そのうち連続的なヨコハケは、工具を止めながら連続して施すB種に分類されているものであるが、静止の痕跡は比較的明瞭で、その間隔は狭いものであった。また静止痕の角度は、突帯に対しておおむね垂直であるものが多く、傾斜しているものでもその角度は小さいという特徴がみられた。ハケ原体の条数は、１次調整のタテハケ（ナナメハケ）が比較的細かいのに対して、２次調整のヨコハケはやや粗いという特徴がみられる。

次に内面の調整を見ると、ナデや指オサエのみによって仕上げるものが主体であるが、ナデとタテハケ（ナナメハケ）を併用するものなどもあって、多様であるといえる。ナデについては、指によるとみられるナデの単位が明瞭に分かるものがある。また、ナデの施工が弱いことによって、粘土帯の接合痕をとどめている個体もいくつか認められた。

焼成・色調・胎土　焼成については、おおむね良好で、土師質に焼き上がっており、須恵質など窯窯で焼成されたと考えられるものは認められなかった。また、黒斑は８個体で確認できたが、その占める範囲は比較的狭く、複数個所みられるものはほとんどなかった。

色調については、淡い橙褐色や赤橙色系を呈しているものが大部分を占めており、赤色顔料などを塗布されたものは確認されていない。

胎土は、全体的に緻密で均一なものがほとんどであって、肉眼観察によって大きな相違を認めることはできなかった。

（3）第６次調査の出土遺物

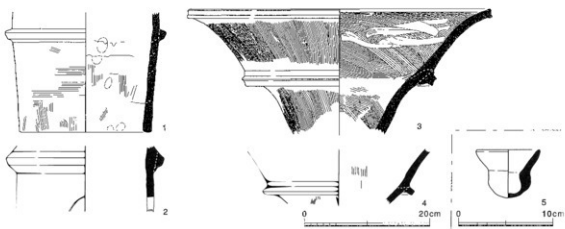
第６次調査では、整理箱にして15箱の遺物が出土したが、第１区から13箱分が出土したのに対し、第２区は２箱分と少ない。出土遺物には、恵解山古墳に伴う埴輪、土製品、結晶片岩のほか、近世の土師器、陶磁器、中世の土師器、瓦器、陶器、銭貨（元豊通寶）、木質遺物、長岡京期～平安時代の土師器、須恵器がある。長岡京期以降の遺物は数少なく小片が主体を占める。ここでは、第１区から出土した恵解山古墳に伴う遺物の一部を報告する。ただし、いずれも転落石の間や周壕埋土から出土した破片であり、全体的な形状が窺える資料は限られていた。

A．普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪

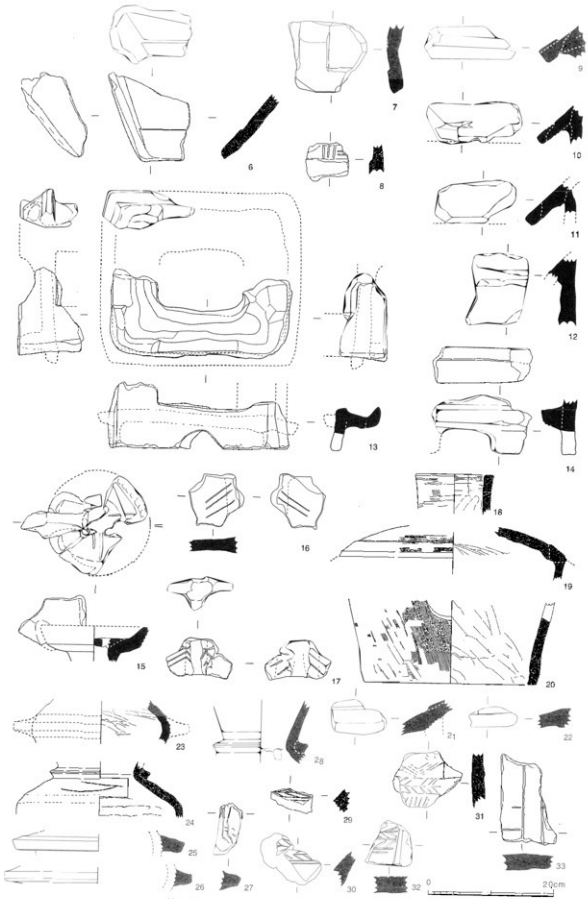
普通円筒埴輪　第26図の１は、普通円筒埴輪の底部片と考えられる。法量は底部の径が21cm、底部の高さが15.6cmを測り、第５次調査埴輪列資料の底部高16cm前後の一群と合致する。ただし、器壁は底部付近でも1.2cm前後と薄く仕上げられており、色調も黄土褐色を呈する。外面調整には、１次調整のタテハケと２次調整に連続的なヨコハケを施す。内面調整は、タテハケの後に丁寧なナデが施され、底部付近と粘土帯の接合部には指オサエが認められる。ハケの線条は太く、内外面とも同一の原体が用いられたと考えれる。２は、円形の透孔と突帯を含む破片で、突帯部の直径が25.2cmを測る。突帯の貼り付け面の幅が3.3cmと広く、断面形状が他の円筒埴輪に見られる突帯とは異なっていた。また、内外面の色調が橙赤色で、焼成が軟質であるなど異質な特徴が多く、形象埴輪の基部である可能性を残す。

朝顔形円筒埴輪　３は、口径が48.5cmに復原され、外面調整にタテハケ、内面にはナナメハケと部分的なナデが施される。複合口縁の接合部は粘土の充填が不充分な部分があり、ハケ原体による斜め方向の刻み目が認められる。全体的に硬質な焼成で、内外面の色調は乳橙灰色～黄土褐色を呈する。４は焼成が軟質で、内外面調整の詳細は摩耗のため分からない。

第１区では普通円筒埴輪の口縁部片、普通円筒埴輪ないし朝顔形円筒埴輪の底部片、突帯片が多数出土しているが、全て土師質で窯窯焼成されたものは皆無であった。また、破片のなかには、ヘラ記号を持つもの、赤色顔料の塗布された破片が数点認められる。今後、これらの破片資料に関して、口縁部、突帯、底部の形態や調整手法の検討を行なう必要がある。



第26図　第６次調査出土遺物実測図－１（1/4・1/6）



第27図　第６次調査出土遺物実測図－２（1/6）

B．形象埴輪

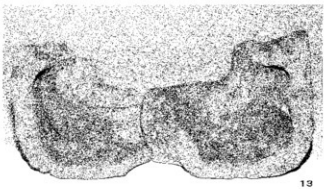
形象埴輪では、家形、蓋形、盾形、草摺形、盾形の５種類を確認している。出土量を破片数で単純に比較すれば、上記の順に多く、草摺形、盾形は数少ない。

家形埴輪　屋根（第27図６～８）、軒から壁面（９～12）、据台（13・14）の破片を図示した。６は破風から軒の破片で、軒先には押縁を表した帯状突帯を貼り付ける。７・８にも押縁の帯状突帯が認められ、８では線刻による網代の表現が認められる。９～12は軒先を含む破片で、帯状突帯を貼り付けるもの（９・12）と、その表現が無いもの（10・11）が認められた。据台では、建物の内部に床を設ける特殊なもの（13）と、一般的な床を持たないもの（14）がある。

13は、梁行・桁行ともに１間で、内部には中央が長方形に空いた床が設けられていた。建物の法量は、突帯の幅を除き桁行が約29㎝、梁行は復原で約24.5㎝を測り、正方形に近い平面形態を想定できる。壁面には柱の表現がなく、四方の中央には幅10㎝前後の大きな開口部が設けられていた。据台は、高さが突帯の上辺までで4.5～６㎝を測り、四方の中央部に幅７㎝程度の半円形の抉り孔を設ける。突帯の突出は２㎝程度と短いが、据台の底部四隅から突帯を支えるための粘土材が斜め方向に貼り付けられていた。床は、壁の内面に厚さ２㎝程度の粘土帯を２ないし３重に継ぎ足して作られ、裏面には粘土帯の接合痕跡を明瞭に残している。半円形抉り孔の内側には、床面の重量を支えるための補助的な粘土材が設けられていた（第28図左）。床の中央に開けられた長方形部分は縁が盛り上がっており、桝状の構造を模したと考えられる。また、不明瞭ながらも床面の両短辺は長軸線に向かって傾斜しており、この部分を溝状と推定すれば、13の家形埴輪には導水に関わる性格を窺うことができる。

蓋形埴輪　立ち飾り部（15～17）、軸受け部（18）、笠部（19・21・22）、基部（20）がある。

15は、立ち飾り部の飾り板から受け皿、筒状部の破片である。飾り板は厚さ２㎝程度で、この部位では施文が認められない。受け皿部の口縁部は短く外傾して立ち上がり、口径は17㎝程度に復元できる。受け皿は中央部から屈曲して、最大径約８㎝の中空の筒状部と接続している。受け皿部と筒状部の屈曲部内側には、上から十字形の粘土帯を充填して飾り板の土台とし、四隅には筒状部へ貫通する円孔が残されていた（第28図右）。また、この土台には、飾り板との接合を強固にするための沈線が２条刻まれている。16・17は飾り板の破片で、17は飾り板の交差最上部に相当する。飾り板の各面には、２条ないし３条１対の線刻が中心から斜め下方向に施されており、17では斜め上方向の線刻も認められた。18は、口縁部が直立する軸受け部片で、口径は12.5㎝を測る。口縁端部の外面に突帯などは付加されていない。19の笠部片は、幅約３㎝の帯状突帯を貼り付けるもので、直径は帯状突帯の下辺で約36㎝を測る。帯状突帯の下方には笠縁部の剥離痕跡が認められ、ハケ原体による斜め方向の刻み目と布目状の圧痕を残す。21・22も笠部の破片で、21に帯状突帯が、22には縦方向と横方向の線刻が認められる。20は、ハケ原体や胎土、色調の特徴から、18・19と同一個体の蓋形埴輪基部と考えられる。底部径は27.6㎝を測り、直径８㎝程度の透孔が穿たれていた。外面調整には精緻なナナメハケが施され、底部付近はナデによって丁寧に仕上げられている。内面調整には、腰の強い斜め方向のナデが施されている。



第28図　家形埴輪裾台と蓋形埴輪受け皿部の裏面

壺形埴輪　壺形埴輪と考えられる破片には、頸部（28）、体部（23・24）、鍔部（25～27）があり、いずれも色調は橙褐色系を呈し軟質に焼成されていた。23・24は、体部最大径が22.4、26.4㎝を測り、最大径より上に鍔部の剝離痕跡を残している。24は体部外面に三角形状のヘラ記号を施す。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられており、頸部の突帯外側での最大径は24で16㎝、28が15㎝を測る。鍔部は貼り付け部分の幅が３㎝前後で、突出は2.5～3.5㎝を測る。27は、鍔部の上面に２条の線刻が認められるが、破片であり意匠の内容は分からない。また、壺形埴輪以外の形象埴輪である可能性も残している。

草摺形埴輪・盾形埴輪　いずれも破片数が少なく、部位などの詳細は定かでない。草摺形埴輪と考えた破片（29・30・図版８-34）は綾杉文、直線文を施しており、焼成が軟質で色調は橙白色系を呈する。盾形埴輪（31～33）では、綾杉文、直線文、菱形文、鋸歯文が認められる。色調は灰褐色から茶褐色を呈し、焼成は比較的良好であった。

C．土製品

ミニチュア土器の壺（第26図５）は、前方部と造り出し接続部の墳丘側にある石列内から出土した。土師器精製三種の坩を模したもので、器高5.1㎝（口縁部の高さ2.2㎝）、口径6.8㎝を測る。口縁部から体部の器壁は厚く、体部内面の下半には強いナデを施す。なお、本調査の出土遺物では５のミニチュア土器以外に、古墳時代の土製品、土師器を確認できなかった。

D．結晶片岩

結晶片岩は、第１区から４点出土しているが、いずれも長軸4.2～11.4㎝の小片であった（図版８-35～38）。色調は青灰色を呈するが。38の片面は紅灰色に発色していた。結晶片岩は周辺の山谷では産出しない搬入品で、後円部の埋葬施設である竪穴式石室の壁体に使用されたものと考えられている。

E．出土遺物の分布状況

第１区は後円部から前方部、造り出しが想定されていた調査区であり、周濠内から出土する遺物の来歴を少しでも明らかにすることが重要と考えられた。このため、調査区南東隅を起点とする１m区画（南北がA～Kの11区、東西が０～11の12区）のグリッドを設定し、遺物の取り上げ作業を行った。

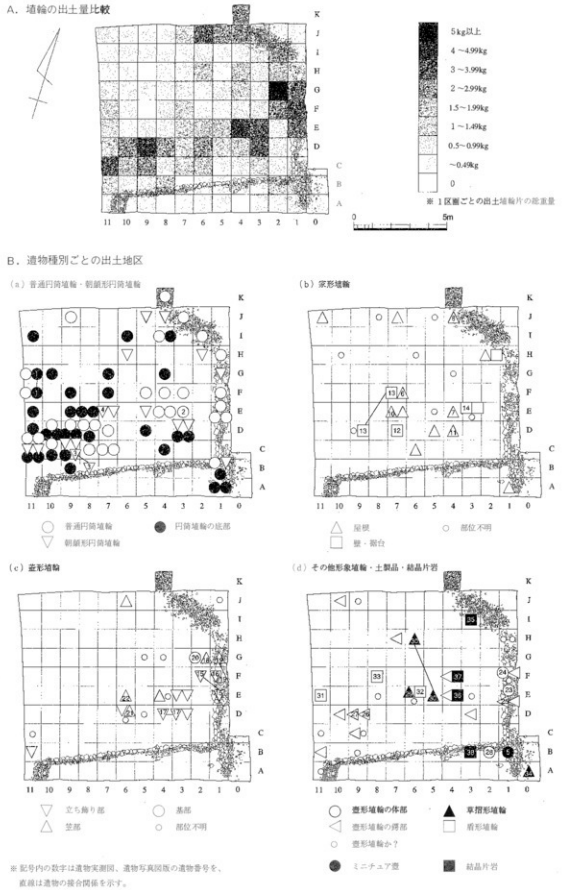
第29図Aは、出土遺物の多少を区画ごとの総重量として示している。出土遺物が比較的集中する範囲は、後円部裾の西側（J4～6）、推定くびれ部の南側（F1・2、G1・2）、造り出し接続部の北西側（E3・4）、造り出し先端部の北側（D8～10）に認められる。このうち、最も多くの遺物が出土しているのが推定くびれ部の南側であり、後円部、前方部に加え一部造り出しからも遺物がもたらされた結果と考えられる。一方、E3～D10（C11）の集中範囲は造り出し北辺の方向と対応しており、遺物が造り出し上からもたらされた可能性が高い。また、この範囲は造り出しの基底石列から1m以上離れた転落石密集範囲（第16図）の先端部に相当する。後円部、推定くびれ部とは異なり、基底石列付近のより古い段階の転落石を含む土には遺物が少ないことから、造り出しの削平といった大きな改変によって動かされたものと推測できる。

第29図Bには、整理作業で種別や部位が明らかになった円筒埴輪、形象埴輪と、土製品、結晶片岩の出土地区を示した。最も広域に分布するのが普通円筒埴輪、次いで朝顔形円筒埴輪で、ほぼ前述のA図に対応する状況を示す（a）。ただし、後円部から前方部の裾部付近では底部片がほとんど出土していない。墳丘第1段斜面・平坦面の評価と相まって留意すべき分布状況である。家形埴輪は、E3～D9の範囲に分布しており、多くが造り出し上に配置されていたと考えるのが妥当だろう。長方形に空いた床を設ける家形埴輪（13）は最も西側から出土しているが、この範囲は後円部、推定くびれ部から離れており、造り出しとの関連をより強く窺える（b）。蓋形埴輪は、推定くびれ部の南側から造り出し接続部の北西側に分布する。立ち飾り部から筒状部片（15）と、同一個体と想定した軸受け部（18）、笠部（19）、基部（20）は、推定くびれ部の南側に集まっており、後円部からもたらされた可能性も考慮しなければならない（c）。草摺形埴輪、盾形埴輪の多くは調査区の中央部、やや遺物が希薄な範囲で出土している（d）。

なお、第2区の遺物は整理箱にして2箱分出土しているが、埴輪片は後世の木片より少なく、地山斜面上の転落石間にもあまり含まれていなかった。また、埴輪片の大半が小片で、図示できるものはなかった。

6 まとめ

今回の第6次調査では、第5次調査で発見された西側造り出しの規模が明らかとなり、造り出し基底石、葺石の状況を確認することができた。また、造り出し接続部の墳丘側で確認した石列も重要な成果と考えられる。もう一つの調査課題であった後円部については、墳丘裾の基底石が検出されず、正確な規模や葺石の状況が分からなかった。しかし、第3次調査の副葬品埋納施設を墳丘中軸線と仮定し、本調査の後円部地山斜面裾部の円弧と推定くびれ部の位置などを検討した場合、後円部径約78m、くびれ部幅約53m、前方部長約61m、全長約128mという推定値が得られ、後円部径と前方部幅が拮抗し前方部長が比較的短い平面形態を提示できる（第7図）。ただし、今回示した値は推定値であり、今後もより正確な数値に置き換える作業を進めなければならない。また、地山斜面の評価など恵解山古墳の立体的な構造を明らかにするためにも、より広範囲で現存する墳丘斜面を含めた発掘調査を行なう必要がある。



第29図　第６次調査の遺物出土量・遺物分布図（1/200）

遺物では家形埴輪と蓋形埴輪が多く出土しており、形象埴輪について良好な資料が得られた。家形埴輪では、中央部が長方形に空いた床を設けるものがあり、導水に関連する施設を模したと考えられる。さらに精査が必要であるが類例が希な資料である。遺物出土地点の検討から、この家形埴輪は造り出し上に配置されていた可能性が高く、造り出しにおける埴輪祭祀を検討する上でも重要な意味を持っている。また、造り出し接続部の墳丘側で確認した石列からは、ミニチュア土器の壺が出土しており注目される。

最後に、本書には第４・５次調査出土遺物の概要を収録することができた。とくに、第５次調査の円筒埴輪列資料は原位置を保つまとまった埴輪群であり、恵解山古墳の検討だけでなく、周辺地域を含めた円筒埴輪の研究資料としても非常に重要である。

注１）梅原末治「恵解山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第６冊　1926年

２）恵解山古墳の発掘調査履歴

第１次調査：三上貞二『恵解山古墳周壕調査概報』『長岡京市報告書』第２冊　1975年

第２次調査：三上貞二『恵解山古墳周壕第二次調査概報』『長岡京市報告書』第３冊　1977年

第３次調査：山本輝雄他『恵解山古墳第３次発掘調査概要』『長岡京市報告書』第８冊　1981年

第４次調査：山本輝雄『恵解山古墳第４次・長岡京跡右京第783次調査概要』『長岡京市報告書』第46冊　2004年

第５次調査：原　秀樹『恵解山古墳第５次・長岡京跡右京第827次調査概要』『長岡京市報告書』第47冊　2005年

付表－２　報告書抄録

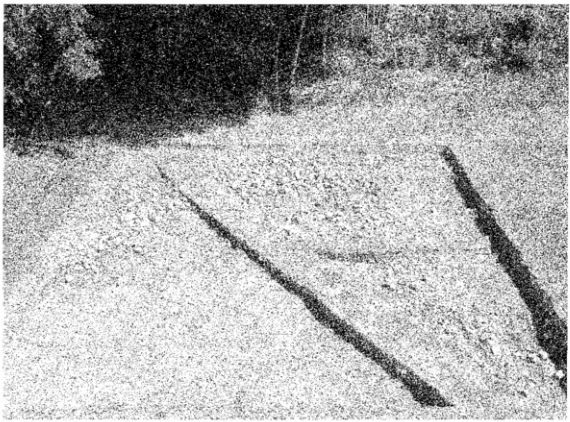
ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第４８冊
編著者名	西村　康、金田明大、山本輝雄、中島皆夫
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 恵解山古墳 南栗ケ塚遺跡	長岡京市 勝竜寺1203-3 他	26209	107 200 103	34度54分 39.5秒	135度42分 0.8秒	20050920 ～ 20051109	142m²	遺跡範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第859次）	都城	長岡京期		土師器・須恵器	
恵解山古墳（第６次）	古墳	古墳時代	墳丘裾・造り出し 周壕	円筒埴輪・形象埴輪・ 土師器・結晶片岩など	西側造り出しの規模が明らかになった。
南栗ケ塚遺跡	集落	平安～江戸時代		土師器・瓦器・陶磁器	

※　緯度経度の測点は第１区の中央部である。また、緯度経度の座標系には国土座標旧座標系を使用した。

図　版

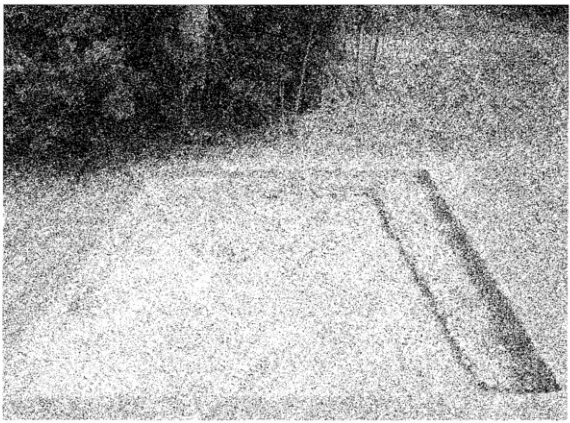


（１）第１区の転落石検出状況（西から）

（２）後円部の転落石検出状況（北西から）

（３）造り出しの転落石検出状況（東から）

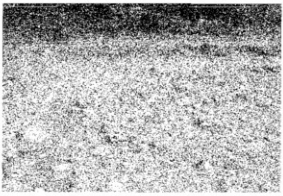
図版二

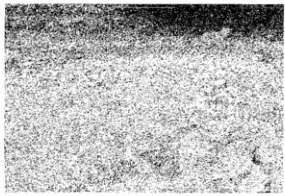


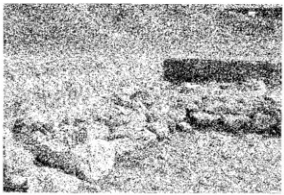
（１）第１区の後円部・前方部・造り出し・周壕（西から）

（２）後円部・前方部・造り出し・周壕（北から）

（３）後円部・前方部・造り出し・周壕（南から）


（１）後円部の地山斜面（西から）


（２）推定くびれ部の検出状況（南から）


（３）前方部・造り出し接続部（北西から）

（４）造り出し接続部付近の葺石（北西から）

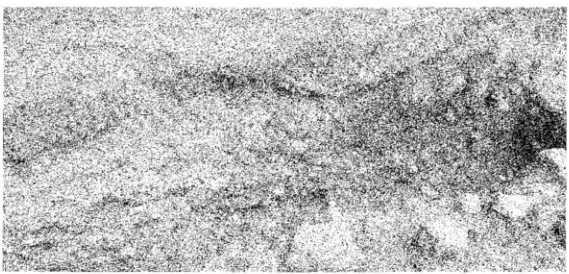
（５）造り出し北辺の基底石列（西から）

（６）造り出し北辺の基底石列（東から）

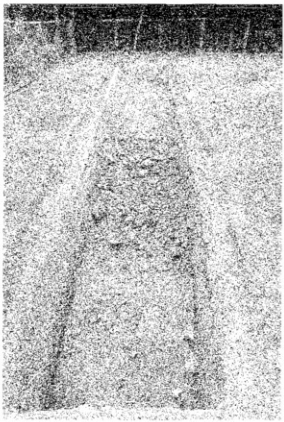
（１）造り出し接続部内側の石列（南東から）

（２）造り出し接続部内側の石列（北から）

（３）造り出し・前方部接続部の断ち割り（北東から）



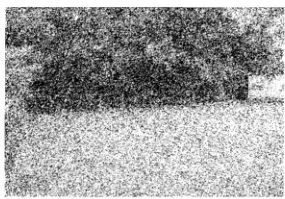
（４）推定くびれ部・前方部盛土の断ち割り（北西から）



（１）第２区の転落石検出状況（西から）

（２）第２区の後円部・周壕（西から）

（３）第２区の後円部・周壕（南東から）

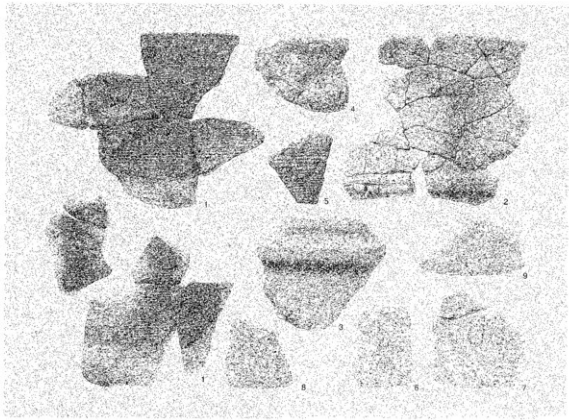


（４）第２区調査前の状況（西から）

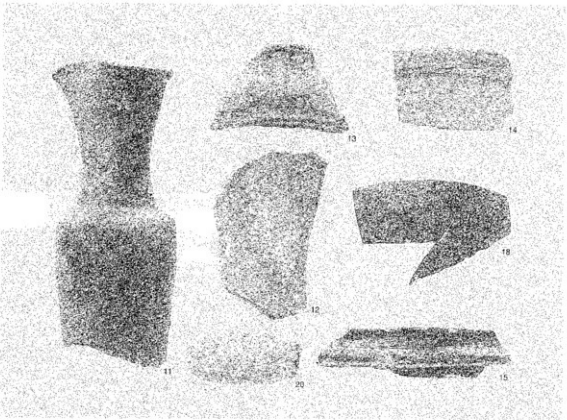
（５）第２区埋戻し作業風景（東から）

図版六

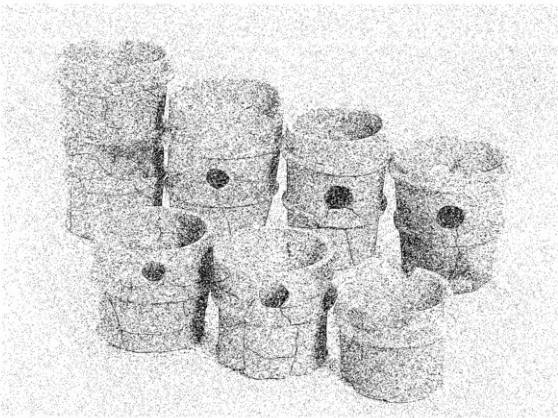
恵解山古墳第４次・長岡京跡右京第783次調査の出土遺物



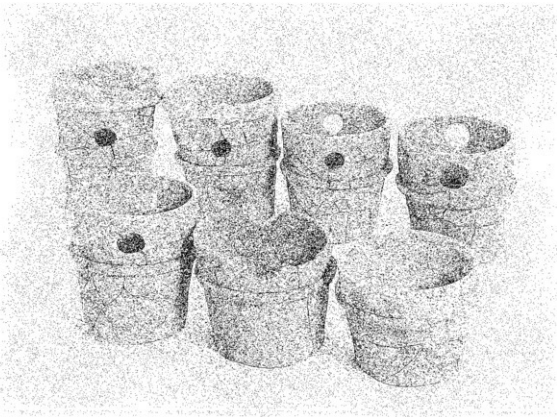
（１）第４次調査出土埴輪



（２）第４次調査出土遺物



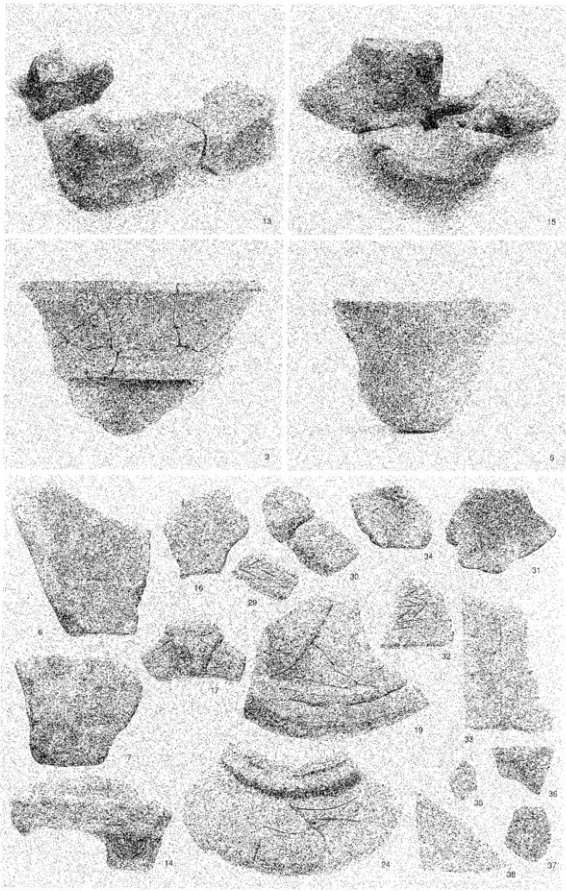
（１）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列１～３・６・７・10・12号埴輪）



（２）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列４・５・８・９・11・13・14号埴輪）

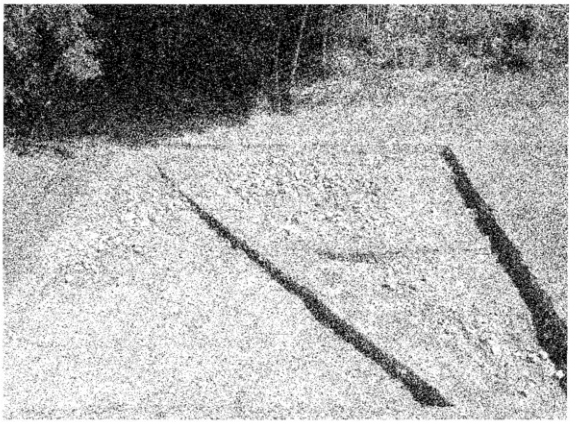
恵解山古墳第６次・長岡京跡右京第859次調査の出土遺物

図版八



第６次調査出土遺物

図　版

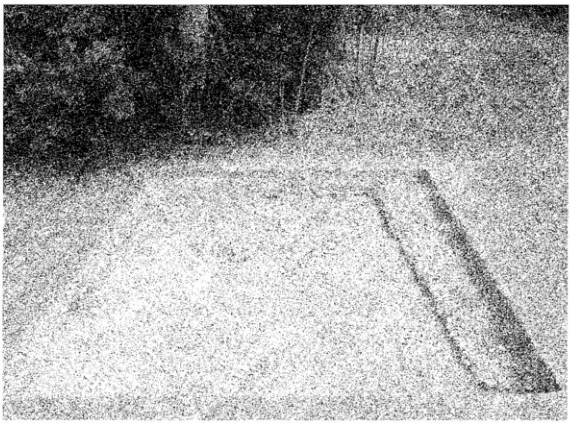


（１）第１区の転落石検出状況（西から）

（２）後円部の転落石検出状況（北西から）

（３）造り出しの転落石検出状況（東から）

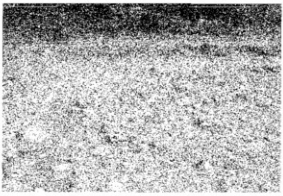
図版二

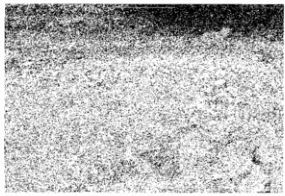


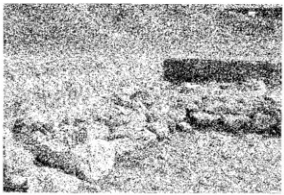
（１）第１区の後円部・前方部・造り出し・周壕（西から）

（２）後円部・前方部・造り出し・周壕（北から）

（３）後円部・前方部・造り出し・周壕（南から）


（１）後円部の地山斜面（西から）


（２）推定くびれ部の検出状況（南から）


（３）前方部・造り出し接続部（北西から）

（４）造り出し接続部付近の葺石（北西から）

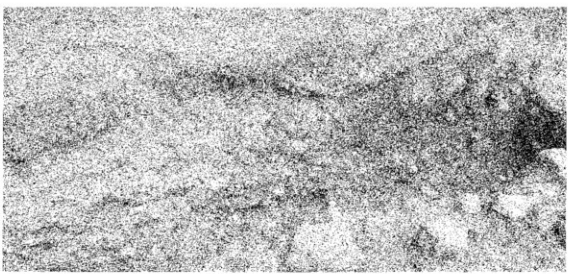
（５）造り出し北辺の基底石列（西から）

（６）造り出し北辺の基底石列（東から）

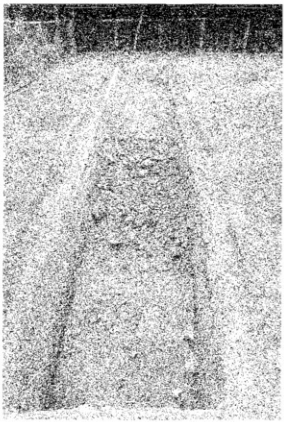
（１）造り出し接続部内側の石列（南東から）

（２）造り出し接続部内側の石列（北から）

（３）造り出し・前方部接続部の断ち割り（北東から）



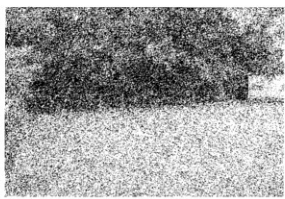
（４）推定くびれ部・前方部盛土の断ち割り（北西から）



（１）第２区の転落石検出状況（西から）

（２）第２区の後円部・周壕（西から）

（３）第２区の後円部・周壕（南東から）

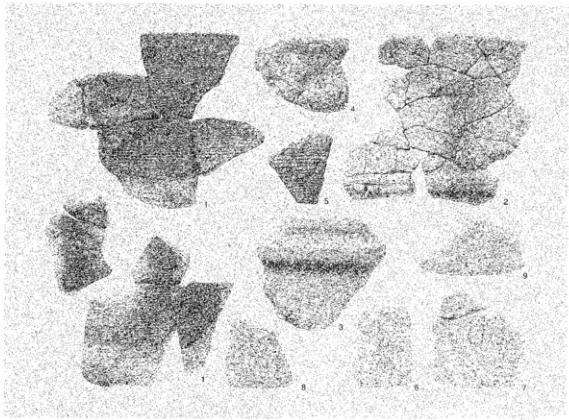


（４）第２区調査前の状況（西から）

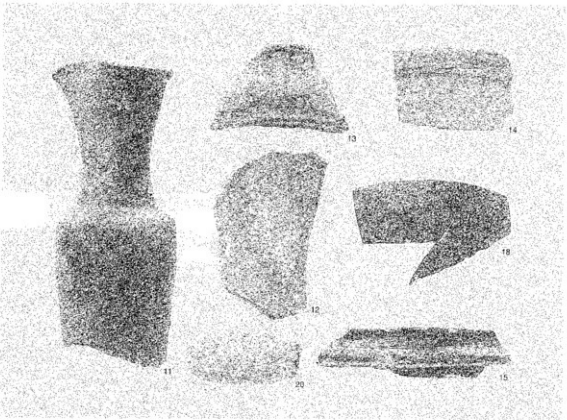
（５）第２区埋戻し作業風景（東から）

図版六

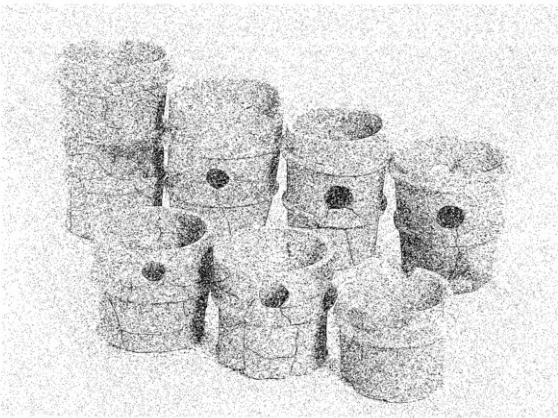
恵解山古墳第４次・長岡京跡右京第783次調査の出土遺物



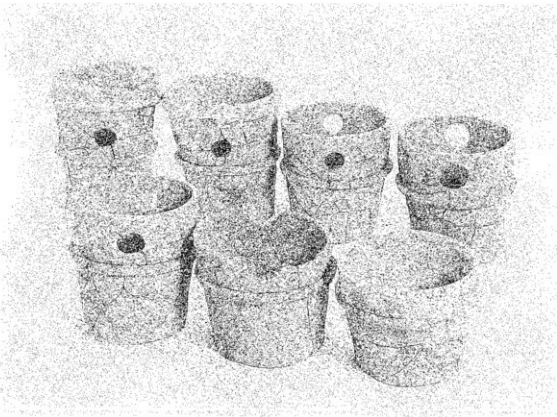
（１）第４次調査出土埴輪



（２）第４次調査出土遺物



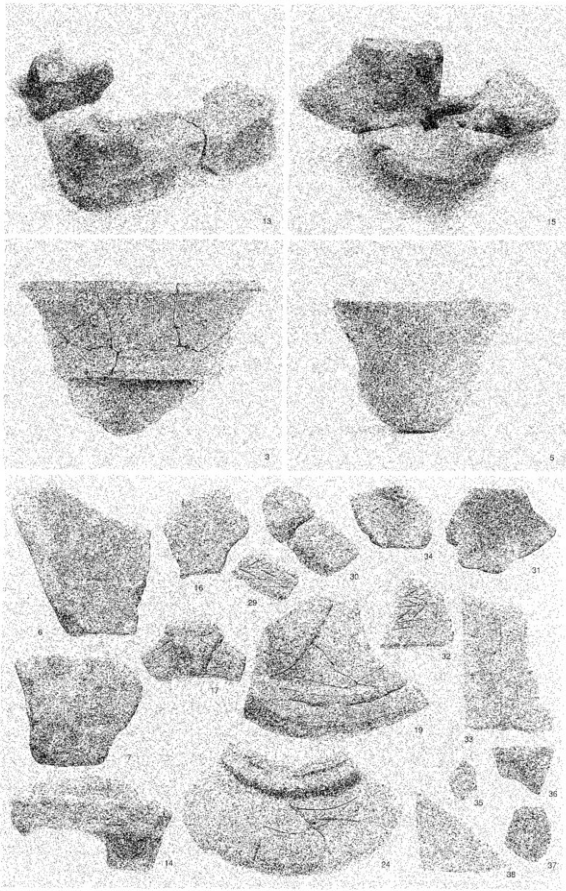
（１）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列１～３・６・７・10・12号埴輪）



（２）第５次調査出土埴輪（円筒埴輪列４・５・８・９・11・13・14号埴輪）

恵解山古墳第６次・長岡京跡右京第859次調査の出土遺物

図版八



第６次調査出土遺物

長岡京市文化財調査報告書 第４８冊

平成 18（2006）年３月28日　印刷
平成 18（2006）年３月31日　発行

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622　FAX　075－951－0427
発　行　長岡京市教育委員会
〒617－0851　京都府長岡京市開田一丁目１－１
電話　075－951－2121（代）
印　刷　大和写真工業 株式会社
〒569－0806　大阪府高槻市明田町１-12
電話　072－681－1805（代）
FAX　072－681－1830